

松 山 大 学 論 集  
第 29 卷 第 2 号 抜 刷  
2 0 1 7 年 6 月 発 行

〈Review of Overseas Literature〉  
Franz M. Wuketits : „*Darwins Kosmos*  
*Sinnvolles Leben in einer sinnlosen Welt*“

入 江 重 吉

## 資 料

### 〈Review of Overseas Literature〉

Franz M. Wuketits : „*Darwins Kosmos*

*Sinnvolles Leben in einer sinnlosen Welt*“

入 江 重 吉

ここで紹介する文献は、Franz M. Wuketits : „*Darwins Kosmos Sinnvolles Leben in einer sinnlosen Welt*“ (Alibri Verlag, 2009) である。

原著者 Franz M. Wuketits (フランツ・M・ヴケティツ) 教授 (以下、敬称略) は 1955 年生まれで、ウィーン大学にて動物学、古生物学及び哲学を修めた。現在、ウィーン大学とグラーツ大学で科学論、認識論、生物科学などの講義・演習を担当している。ヴケティツの研究業績はケタはずれに多く、単著・編著・共著は三十数冊を超え、その内 8 冊は外国語に翻訳されており、研究論文等は優に 440 点に及ぶ。もちろん、これらの業績の中には内容的に相互に重複するもの、アレンジあるいはリメイクしたものなども散見されるが、それにしてもおびただしい数である。しかも、彼はとくにドイツ語圏で高い評価を受けて広範な読者を得ている。ちなみに、ヴケティツは若くして才能を認められ、1982 年には、科学出版部門オーストリア国家賞を受賞した。

ヴケティツは 1980 年代、動物行動学者のコンラート・ローレンツ (1903-1989) 及び、その弟子に当たる生物学者ルーベルト・リードル (1925-2005) のもとで、ローレンツの創始した進化論的認識論の研究に力を注いでいる (1983 年に、ローレンツとの共編著『思考の進化』を公刊した。なお、このスペイ

ン語版が翌年出ている)。ローレンツ亡きあとは、ローレンツ理論の批判的総括をしながら、しだいに、以前からローレンツ批判を展開していたR・ドーキンス(1941-)やE・O・ウィルソン(1929-)などの社会生物学を検討するようになり、ヴケティツの進化論理解もかつてとはかなりおもむきが異なってきたようだ。さらに、そうした文脈でとくに1990年代後半から、進化論的倫理学に関連する著作を精力的に発表している。なお、2000年以降のヴケティツの主要著作は以下の通りである。『根絶と死滅——生物種、民族及び言語の没落』(2003)、『ダーウィンとダーウィン主義』(2005)、『生命倫理』(2006)、『自由意志』(2007)、『ダーウィンの宇宙』(2009)、『豚と人間』(2011)、『ネメシスの使者』(2011)。なお、これまでに出版されている日本語訳には、『進化と知識』(入江重吉訳、1994年[Wuketits, *Evolutionary Epistemology*])、『人はなぜ悪にひかれるのか』(入江重吉・寺井俊正訳、2002年[Wuketits, *Warum uns das Böse fasziniert*])の2冊がある。

さて、紹介する文献を改めて記せば、„*Darwins Kosmos Sinnvolles Leben in einer sinnlosen Welt*“ (2009)である。直訳すれば、『ダーウィンの宇宙—意味なき世界における意味ある生命』となるが、本書の意を汲んで表題をつけるとすれば、『意味なき世界の中でいかに生きるか—現代のダーウィンの視点から』というようになろうか。本書の主要な内容は以下の通りである。

「序論 フェネックの耳はなぜそんなに大きいのか?」「第1章 生命体の秩序 1) 調和的なシステム, 2) 合目的性, 3) 発展の〈奇跡〉, 4) 種の多様性」「第2章 生命と死 1) 生存のみが重要である, 2) …しかし, 死はすべてを呑み込む, 3) 種の絶滅」「第3章 すべては単なる偶然か? 1) 世界の予測(不)可能性, 2) 進化はいかに起こるのか?, 3) ダーウィンは(やはり)正しく洞察した, 4) 偶然と, 発展の必然性」「第4章 インテリジェントでないデザイン 1) 計画と目標のない進化, 2) 人間——自然の幸運(不運)な当たりくじ, 3) 〈開かれた〉進化——不確かな未来」「第5章 意味, 社会, モラル 1) インテリジェント・デザイン——道德主義者にとって

の概念、2) モラルの根拠付けのために、3) モラルと権力」「第6章 ダーウィンの宇宙 意味なき世界における意味ある生命 1) 啓蒙主義と成年状態 (自己意識的な個人)、2) 絶対的なものからの決別、3) それでもなお、意味を肯定する」「結語 新しい個人主義のための最終弁論」。

本書の具体的な内容に立ち入る前に、ヴケティツがかなり執拗にインテリジェント・デザイン (ID) 説を取り上げて批判しているのはなぜなのか、まずその点について触れておきたい。

現在もなお西洋世界で根強い見方は、この世界における生命体の秩序、調和的なシステム、合目的性、多様な生物種の存在を見るとき、そこに何かインテリジェントなデザイナー (神) の意図・計画が働いているのではないかという想定である。これは、プラトン (前 427-347) 以来の西洋の伝統的な形而上学を背景にしたものだ。この形而上学では、客観的で絶対的な価値、目的、意味というものがこの世界に存在すると考えられる。じつは、1990 年代に、アメリカ合衆国の反進化論団体などが ID 説を提唱したと言われる。これは、知的な設計者としての神による世界創造を認めるもので、公立学校で進化論を教えるときは、同時に、ID 説も教えよ、という父兄や信者からの要求が、現在も絶えない、という。クリスチャン科学者の間にも、この ID 説が一定浸透しているようだ。このことはアメリカ合衆国だけの話ではなく、ヴケティツが本書の3箇所では指摘しているように、オーストリアなどヨーロッパでも影響を及ぼしているとのことである。そうした背景があって、ヴケティツは ID に関する議論をかなり詳しく取り上げ、反論を展開しているのである。

こうした世界観に対して、ヴケティツは現代のダーウィンの視点から、生命体の秩序、生命と死の問題、偶然の果たす役割、計画と目標のない進化などを論じて、進化論から見た世界観を展開している。端的に言えば、この世界に客観的で絶対的な価値、目的、意味というものは存在しないということだ。

## 1 「序論 フェネックの耳はなぜそんなに大きいのか？」の議論

フェネックはイヌ科キツネ属で、北アフリカ、シナイとアラビアの砂漠や半砂漠地帯に生息しており、日中は砂を掘った浅い巣穴の中で休息している。その巣穴には羽毛や体毛、ヤシの葉が詰められている。餌となるのは、群居性の夜行性昆虫（とくにバッタ）、カタツムリ、トカゲと小さな齧歯類、また鳥の卵や獣の死骸など。フェネックで最も際立つのは耳、〈巨大な耳〉である。その耳は、キツネ類全体においてだけでなく、イヌの系統全体においてもほとんど見出すことのできないような、非常に大きな耳と言われる。実際に、この動物のせいぜい 30 cm の体長（尾部を除く）に比べて、15 cm の長さの耳は極めて目立つ特徴である。比較のために、温暖な地域のアカギツネと北極に生息する北極ギツネを取り上げると、後者は小さい耳であるが、前者は中程度の耳であることが分かる。こうした違いは何に基づくのだろうか。小さな耳は北極という生存条件の下で北極ギツネに有利であり、それは、灼熱の砂漠では大きな耳がフェネックに有利であるのと同じである。大きな耳は、体温を恒常的に保つことができる温度調節器として役に立つ。

それ故、フェネックの耳はなぜそんなに大きいのかという問いは、次のように答えられる。すなわち、フェネックはその生存条件によく適応しているということだ。その際、その耳は音響学的器官としても役に立つということをついでに知っておくことは興味深い。つまりその耳で、ごくかすかな物音でさえ知覚することが可能である。この物音からフェネックは獲物にも外敵にも気づくことができるし、適切な行動あるいは反応が可能となる。

フェネックの耳は一つの典型的な事例であるが、チャールズ・ダーウィン（1809-1882）以前に、こうした事例を説明しようとした自然研究者がいた。いわゆる自然神学者である。その代表的な人物として、英国のウィリアム・ペリー（1743-1805）を挙げることができる。自然神学者たちはあらゆる適応において、神の知恵が確証されると見た。彼らは厳密な自然研究者であり、生命

体のあらゆる現象を神学のために研究し、それ故、神の全能を証明しようと努力していた。厄介な問題への回答も彼らにとっては神の命令を支持するものだった。多くの動物が他の動物によって殺害されるというのも、善良な神のイメージにうまく適合して説明された。例えば、肉食獣は弱くて年老いた動物に迅速な死をもたらし、苦しみから解放するので、世界における悪を減少させる。つまり、神は他の被造物があまり長く苦しむ必要のないように肉食獣を創造したのである。こうした議論は科学的根拠のないものであったが、ペーリーなどの自然神学者は、合目的性の問題に取り組むダーウィンの進化的思考に影響を及ぼしたことは確かであろう。

ダーウィンの関心事は、以上に見たフェネックなどにおける合目的性の問題を科学的に説明することにあった。ダーウィンの努力の結果が淘汰説、自然淘汰の理論であり、この説は今日に至るまでその影響範囲において実際に克服されてはいない。というのも、この説は、自然における競争と、いわばそこから自動的に起こる、繁殖能力の違いに基づくその都度の最も有能な者の生存のみを認めるのであり、それによれば、自然におけるあらゆる〈高次の意図〉やあらゆる長期の計画は余計なものとなるからである。

## 2 「第1章 生命体の秩序」の議論

### 1) 調和的なシステム

昆虫の翅、鳥の羽毛あるいは哺乳類の体毛を顕微鏡で観察する人は、注目すべき秩序の模様を確認するだろう。しかし、われわれには顕微鏡は必要ない。目に見える生物の世界の至る所にある秩序と調和に気づくためには、見開いた眼があれば十分である。

花の開花、カタツムリの殻、ヒトデ、魚のヒレ、齧歯類の歯、チョウの羽の色彩模様など、あらゆるものが秩序づけられている。動物の移動の場合も、われわれは秩序と調和に気づくし、例えば、チーターが獲物を追いかける時とか、鷲が空中で円を描く時、優雅さについて語ることもできる。われわれが自然の

中で、植物や動物において観察する多くのものによって、われわれの美的感覚が呼び起こされ、美しいと感じられる。これに対して、例えば、オランダの画家ヒエロニムス・ボス（1450頃-1516）の迷宮的な作品による異様な被造物、すなわち、頭から足が生えた怪物、グリロス（頭足人）は、いかに嫌悪感と畏怖の念を抱かせるものか。それはあってはならないような姿形であり、実際には存在しないものである。というのも、こういう姿形は生存可能ではないからである。

## 2) 合目的性

自然科学の中で、生物学は、〈何のために〉という問いが一つの役割をなす唯一の科学である。しかし、目的というのは物理学においては何ら意味を持たない。もしもコーヒーカップが床に落ち割れた場合、それはまったく引力の法則ないし落下の法則に従うのであり、そこに目的は何ら含まれない。場合によっては、誰かが怒りにまかせてコーヒーカップを落下させたかもしれない。しかしその場合、その当該の人物が落下させるという目的を持っていたのであるが、コーヒーカップそのものはその目的には中立のままである。

ところが、ガゼルを追いかけるチーターは、この場合明らかに一定の目的を追いかけている。同様に、キツネの前で疾走して逃げるウサギや、尾羽を逆立てる雄のシチメンチョウ、犬歯を見せつけるイヌなどもそうである。ところで、眼や耳、心臓や腎臓など個々の器官はいずれも明らかに有機体そのものの中で一定の目的をかなえるが、逆に、それらが役に立たなくなると、働きは弱まって、生命を維持することもはやできなくなる。それ故、目的論的説明は生物学において広く行われている。

現代生物学において、目的ないし合目的性が問題になる場合、世界の出来事の目標指向性としての古くさい目的論が使われているわけではない。コンラート・ローレンツはこれについて次のように述べた。——もしもわれわれが、「ネコは何のために鋭く曲がった引き込み可能な鉤爪を持っているのか」と問

い、直ちに「ネズミを捕まえるため」と答えたとしたら、この問いは決して、宇宙と有機的進化に内在する目的指向性への信仰告白を意味するのではない。その問いはむしろ、「ネコのような肉食獣（ネコ科）にこのような鉤爪の形態を備えさせた種維持的な価値は、いかなる特殊な機能を持つのか」という問いの短縮形にすぎないのである。

すなわち、自然淘汰はつねに、ネコ科の中で、鉤爪を備えた肉食獣のみを促進した。ネコ科は明白に獲物を掴む動物なので、鋭く曲がった引き込み可能な鉤爪はネコ科にとっては有利であることが分かる。それは進化において、初めからあらかじめ用意されていたのでは決してなく、特殊な生存条件の下で登場した一定の肉食獣の形態とともに初めて成立したのである。時間の経過の中で、相応の鉤爪を備えたネコのみが有利であることが分かり、その他のネコは〈淘汰〉された。

この合目的性の形態を伝統的な意味での目的論から区別するために、生物学ではずっと前から、〈テレオノミー Teleonomic〉という表現が定着していた。テロス (telos) とは、この場合、目的の直接性、器官の合目的性、所与の全システムの枠内での機能ないし行動様式の合目的性のみに関係する。テレオノミーは、目標の知識なしに目標指向的に作用する、計画に従った機能を、しかも、進化的に成立した遺伝的プログラムに基礎を置いた機能を意味する。テレオノミー的現象はシステム維持的な性格を持つ。

生物学におけるテレオノミー的な説明は、原則的に、構造、機能ないし行動様式のシステム維持的な価値への問いに答えるものである。ネコの鉤爪、ハリネズミの針状体毛、鳥類の翼、ライオンを目前としたガゼルの逃避反応あるいは雄のオオライチョウの求愛行動が問題になる場合、これらすべては、目的の観点の下でのみ説明できる。しかし、ここで問題となるのは意図を持たない目的である。なぜなら、もっぱら合目的なもののみを引き起こす自然淘汰は、いかなる意図をも知らないからである。



### 3) 発展の〈奇跡〉

17世紀と18世紀に、自然研究者の間で、いわゆる前成説が大人気を博した。その代表者は、〈完成した〉生物がすでに胚の中に、いわば小さな雛型として存在すると信じ切っていた。こうした仕方で、〈ホムンクルス〉、微小人間という考えが出てきた。つまり、〈大きな、完成した〉人間に成るためには、いわば蕾のように展開する必要がある、ということだ。また、ゴットフリート・W・ライプニッツ（1646-1716）は、あらゆる細部まであらかじめ決定された世界という考え、すなわち予定調和説を唱えた。

生物の個体的な発展においては、もちろん、目的論的観点に特別な意味が認められる。すなわち、有機体は、明らかに、終局目的という意味で、つまり、一定の目標に向かって発展する。これによって、20世紀の前半に、多くの生物学者は、多かれ少なかれ秘密に満ちた作用の仕方を有する特殊な生命力を信奉した。例えば、動物学者のハンス・ドリーシュ（1867-1941）である。彼はまさに発生学の領域で貢献をした。彼はとりわけウニ胚を研究し、その結果、有機的発展の過程は自律的な出来事であるが、しかし、終局目的を目指す〈誘導する諸力〉によって導かれる、との確信に達した。

だが、こうした過程は遺伝的指令の帰結以外の何ものでもない。その際、核酸において暗号化された（遺伝）情報が解読される。すなわち、どの生物種も、進化において成立したそれ自身の遺伝プログラムを自由に処理する、さらに、この遺伝プログラムに基づいて、同じ種のつねに新しい個体が発展する。それ故、個体的発展はあらゆる場合に、いわば、包括的な種固有のプログラムの特異な顕現であるが、このプログラムはまたもや自然淘汰による進化の帰結なのである。（逆に進化は、つねに新しい遺伝的情報プログラムの起源と発展を意味する。）このプログラムは非常に長い間、人間には隠されていた。というのは、われわれが一般に認識するのは、新しい種の誕生ではなく、単に、両親に似ていると見える個体の誕生だからである。例えば、アヒルの卵からは再びアヒルが孵化し、ウマからはウマが、ブタからはブタが、人間からは人間が生ま

れるのである。太古から繰り返されたこうした観察によって、後に、種の変化もまったく不可能だと思われるようになった。一つの種の世代間系列は、明らかに、種の変化に対する反証であると思われた。

有機体の個体的発展に関する研究は極めて広い領域であり、その発展において働いている様々なメカニズムはまだ十分に研究されていないことは否定され得ない。個体的発展と進化と（自己発展する生物への）環境の影響の間の複雑な関連は、幅広い基盤をもとに、一部は対立的に議論されている。しかし、発展の〈奇跡〉ということについてはまったく問題とならない。奇跡は科学的に無価値であるという点は度外視するとして、あらゆる生物は、成功裏に繁殖する、つまり、後続する世代に遺伝子を引き渡すという傾向がある、あるいはもっと正確に言うと、遺伝子を用い、生殖によって新しい世代を生み出すという傾向がある、というのは、今日ではまったくの常套句である。この場合、様々な生物種は非常に異なった道を歩んだ。卵を産む種、生きたまま子どもを産む種もあるが、単に発芽によって繁殖する生物もある。動物界で広く行われているのは前者の発展方式である。これによれば、その種の成長した個体とさしあたりは何ら類似しないような、不完全な個体が生まれる、つまり、いわゆる幼生（例えば、甲虫の地虫や跳躍類のオタマジャクシ）である。それでまた、多くの動物は卵の孵化の世話をするが、他の動物は単に子どもを運命に委ねる。自然の中でどれだけ多様な仕方で生殖という仕事が処理されるか、また、胚から完成した生物への道がどれほど違った風に形成されるか、ということはそれぞれの自由裁量に委ねられている。様々な種の発展史に関する多くの詳細は、さらに正確な研究と解明が必要である。しかし、遺伝情報の蓄積と継承に関する原理的なメカニズムは解説されており、われわれは奇跡を想定する必要はもはやない。

#### 4) 種の多様性

現世の、つまり今のところ地球上に生息している植物種と動物種のうち、

200万種以下ぐらいが知られている。しかし現在、事実上地球に存在している生物種の数には推測されているにすぎない。1990年代以来、そうした見積もりは500万から1,000万種に達するが、2,000万種あるいはそれ以上とする見積もりもある。こうした不一致は、主要には、幾つかの生息空間、とりわけ熱帯林がまだ十分に調査されてなく、しかし同時に、急速に人間によって破壊されていることにある。1975年に、ブラジルで昆虫研究者が僅か半日で400種のチョウを発見した。またペルーでは、同じ一つの樹木で一度に40種以上の異なるアリが発見された。それ故、多かれ少なかれ限定された、小さなジオトープ内の種数が把握され、〈予想〉されるのである。(熱帯林だけでなく)多くの生息空間に特徴的な現在の状況は、新しい種が発見されるよりも速く生物種が消失しているということだ。

種の多様性は今日では、いわばまったく異なった大枠の条件の下での、つねに同じ挑戦に対する生命の反応として考えられている。見積もられた種数で計ると、生命を維持するための何百万もの道がある。生命を維持するというのは、繁殖の成功とその前提としての資源の確保を意味する。エスカルゴもヒョウも自分のやり方でそれを成し遂げる。オオアルマジロはその生活ないし生存の戦略を発展させた。ミツバチも同様である。そして一方で、人間は他のやり方を発展させた。その場合、いかなる種も何らかの種よりも〈優れて〉もいないし、〈劣って〉もいない。ただ重要なのは生存である。もちろん、われわれ人間は評価をする傾向がある。それ故、例えばずっと以前から——もちろん、ある観点からは正当であるが——、有害動物と有益な動物との間の区別がなされるのである。

もちろん、なぜそれほど多くの種が存在するのか、という問いは明白である。地球史の初期の段階では、種の多様性は本質的に僅かであった。生命はいわば、できるだけ多くの種を発展させる方向へと努力するのだろうか。もちろん、この問いは形而上学的に解釈され、可能な回答としてはまたもや、地球上における生命の歴史の目的論(生命の目標としての被造物の増加)が求められるので

あろうか。だが、事態はもっと単純である。われわれは、すでに生命体の進化の初期の段階で、ダーウィンの意味で種の起源の前提となるような、競争の条件が支配していた、ということから出発してもよい。1970年代の実験的分析が示すように、競争と自然淘汰は、一定の境界条件及び大枠の条件の下で、すでに無生物の分子的領域において登場しているので、生命及びその多様性の起源の前提として考察され得るのである。地球史の過程で——例えば、大陸の移動、島嶼の形成などによって——、競争と淘汰のためのつねに新しい可能性が形成された。それ故、つねに新しい種の起源と発展が、生命体の包括的な目的論の帰結として解釈される必要はないのである。

その場合、多くの種が再び絶滅したということが考慮されねばならない。エルンスト・マイア（1904-2005）によれば、40億年前より存在していたあらゆる種の99%以上が絶滅したのである。ある一部の種は生態学的及びその他の理由から時間の経過の中で変化し得る。それ故、それは絶滅するのではなく、いわば変化した形態で存続し得る。しかし、種はまた、とくに地理的な孤立化のメカニズムの（とりわけ島嶼の形成の）作用の下で、多くのいわゆる娘種に分化し得る。あるいは、そしてこれが無数の場合に起こることだが、種は絶滅するのである。進化の過程で絶滅した種の数是非常に大雑把に評価されているにすぎない。

### 3 「第2章 生命と死」の議論

#### 1) 生存のみが重要である

そもそも〈生存〉とは何を意味するのか。いかなる生物も永遠に生き続けることはできないから、この表現は〈遺伝的な生存〉、すなわち繁殖成功を意味する。この場合、今日的な概念で言えば、一つの個体とその遺伝子のコピーを作成するということが問題である。個体は、子孫を産み繁殖し、その子孫の子どもたちがまたもや子孫を産むなど続ける場合、間接的に長く生き延びることになる。しかし、繁殖が成功し得るためには、それぞれの植物、それぞれの動

物、それぞれの人間が、できるだけ長く生存し、それ故少なくとも、その都度の種に固有の繁殖可能な年齢に到達しなければならない。すなわち、どの生物も初めから他の生物と競争関係にある。どの生物も食料を獲得し、外敵から身を守らなければならない等々である。どの生物も実際に明白な〈生存の利害関心〉を持つ。そしてこの利害関心には（人間やチンパンジーの場合のように）複雑な意識を持つ必要もなければ、上位の計画者も必要ではない。生存がすべてである。何とかうまく行く限り、生存を維持するという〈利害関心〉は生命の基本的原動力であり、最高の生物学的至上命令である。あらゆる生物は、自分自身の生存を維持することにたえず関わっている。

ダーウィンは次のように述べている。「比喩的に、次のように言うことができるであろう。自然淘汰は日ごとにまた時間ごとに、世界中の至る所で、どんな軽微なものであろうとあらゆる変異を探り出し、劣悪なものを捨て去り、良いものを保存し集積する。機会の与えられた時と所において、それぞれの生物の、その有機的ならびに無機的生活条件を改良する仕事を、無言で目立たずに行う。」ここで、〈改良〉という表現はおそらく、進化には目標あるいは少なくとも進歩があるという思想を示唆するものだ。実際にダーウィンは、前もって定められた進化の目標を信じなかったとしても、彼の時代の進歩思想によって影響されていた。この進歩思想はとくに——18世紀及び19世紀の啓蒙主義の伝統の中で——人間の生存状況の改良可能性に向かっていた。ここでは、ダーウィンが一つの種の内部での個体的変異の存在と、自然淘汰の作用を相互に結びつけていたので、そこから、長い期間における種の変化が考えられた、ということを確認することが重要である。

ところで、種の進化の思想はダーウィンが初めて創始したものではない。それはダーウィンの理論よりかなり古く、1809年に著作『動物哲学』でフランスの自然研究者ジャン・バティスト・ド・ラマルク（1744-1829）が発表していた。何人かの他の学者たちも少なくとも進化論に接近していた。そのうちとくに、もう一人のフランス人、ジョルジュ・L・L・ビュフォン（1707-1788）

の名前を挙げることができる。進化の発見は長期の複雑な精神的過程であり、一夜にして突然起こった革命ではない。17世紀と18世紀は自然史の〈偉大な時代〉として際立っている。遠い国への探検によって多くの生物種が発見され、生物の自然システムは次第に明確な形を取っていった。ところが、たいの自然研究者の考えでは、生物の構造と分布は、ダーウィンが淘汰において見出したようなダイナミックな変化の原理よりもむしろ〈秘密の法則〉を指し示すものだった。ダーウィンは彼の先駆者の存在に気づく前に、進化の事実をもう一度自分自身で発見しなければならなかった。これに役立ったのはとくに〈ビーグル号〉による有名な世界周航であった。この周航は近代で最も重要な研究旅行の一つに数えられるもので、その研究成果に関しては、おそらくあらゆる他の旅行企画（それ自体で見れば、それぞれの企画が実際にかに重要であったとしても）に比べてはるかに勝っている。それ故、ダーウィンの後世に残る貢献は、種の変化の発見ではなく、そうした変化の機構を説明する理論である。

## 2) …しかし、死はすべてを呑み込む

あらゆる生物、植物、動物そして人間は死すべき運命にあり、寿命は限られている。唯一の例外は単細胞生物であり、それは自らの細胞の単純な二分割によって増殖する。それ故、いわばその完全な実体は次の世代において生き続ける。しかし、この〈不死性〉は単に相対的である。すなわち、バクテリアやアメーバが一定の大きさに到達すると、それらは強制的に分割され、一つの個体は二つになり、それ故、もともとの個性性は失われるのである。つまり、ここでも（個体的な）存在の終わりが問題となるが、それは〈死体なき死〉である。

われわれ人間を度外視するとして、生物は、知られている限り、死すべき運命に関して何の問題も持たない。なぜなら、生物はそのことを何も知らないからである。しかし、われわれは個体的に存在した比較的早い時期に、われわれは永遠に生きることはできないし、いつかは最後の時を迎えるだろう、という

事実気づく。この事実は克服される必要がある。われわれは、この事実に対して不死性の願望を対置するが、この願望は実現されないし、実現され得ないということをも多分知っている。

しかし、われわれがすでに死の意識をもって生きることを余儀なくされているとしても、それでも進化によって、われわれ自身の移ろいやすさを次第に小さくするために、いろいろな策略が整えられた。われわれの誰一人として、たえず自分の死について考えることはない。むしろ、われわれは生きることを楽しむことができるし、日常においてはともかく、たいいて他の心配事を抱える。われわれの生活を駆り立てるのは、われわれが死すべき運命にあるという陰鬱な洞察ではなく、できるだけ生命を維持しようとする強い欲求である。さもなければ、あらゆる年老いた人間は、自分が次第に生命の終わりに近づいていくことに対して、ますます大きな絶望感を募らせていくことだろう。それはそうとして、死の意識によって、どれほど逆説的に聞こえようとも、われわれの文化史は決定的に活気づけられたのである。詩、絵画、音楽という偉大な作品が存在するのもこうした死の意識のお陰である。死が主要な、あるいは少なくとも副次的な役割を演じている、文学史のあらゆる作品をリストアップすれば、膨大な数にさえ上るだろう。

当然のことながら、そのような意識は、意味を求めるわれわれの努力の重要な原動力である。われわれがこの世に生まれるのは、再び死ぬためである。どうしてそうなのか。この問いは決して瑣末なものではない。もしわれわれが今、ここで、いかなる意味も認めることができないとしたら、われわれは超越的なものへ意味を投影し、来世のイメージを思い描くことになるが、そのイメージによって、われわれは個体的な〈超出〉への期待について思い違いするのである。

しかし、ここで確認しておきたいことは、生物が生まれ、個体的発展の様々な段階を経て、うまく行けば繁殖し、最後に死を迎える、という素朴な生物学的事実である。数え切れないほどの個体は生殖年齢に達することなく、発達の



早い段階、最も早い段階でも死を迎える。それには非常に様々な原因がある。多くの生物は様々な理由により病的な変種として生まれ、初めから生存競争に耐えられないし、他の生物は運悪く、〈子育て〉中に捕食者の餌となったり、自然災害（干ばつや洪水、地震等）の犠牲になったりする。自然が生命を短縮することは制限されていない。われわれの技術的文明においては、子どもも大人も、たしかに捕食獣に襲われたり食われたりする危険はもはやないが、しかしその代わり、彼らは自動車に轢かれたり、高層ビルの窓から転落したりすることがあるので、生殖年齢に達することもないのである。

死はわれわれすべてを呑み込む。一方では、とくに頑丈な体質を持っていて、仲間よりも優れており、他方では、様々な大災害に遭わないという幸運に恵まれて、非常にたくさんの子孫を産み出している、そういう野ウサギといえども、いつかは死ぬのである。ウサギの平均寿命は8年である。もちろん、あれこれのとくに頑丈な個体は2、3年長く生きることもある。しかし、それによって基本的な区別が変わるわけではない。同じことがわれわれ人間にも当てはまる。われわれのうちの何人かは、平均的な余命をもったその都度の時代に応じて平均以上の年をとっていても、もちろんいつかは、すべての人間のたどる道をたどる。それ故、〈永遠なる生命〉の夢はあらゆる時代に夢のままに留まるだろう。われわれのたいていは理性的にそのことを承知しているが、しかしそれでも、われわれがもはや存在しないであろう世界などというのはどうやっても想像しがたいのである。

多数の変種(個体)から成るあらゆる生物が存在するのは進化のお陰である。しかし、その存在は死なくしては不可能だろう。だがこの場合、死は生命の反対物ではなく、生命の一部である。われわれがそのことと折り合いをつけるかどうか、またいかにしてそうするかということは、別の問題である。われわれの文化圏では、今日、死はますますタブー視される。死者の取り扱いほとんど葬儀社に委ねられ、葬儀社は相当なビジネスを営むことになる。霊を呼び出したり、死そのものを不気味な、幽霊のような力として思い浮かべたりするこ



となしに、死の自然性を受け容れることは、もちろん、人間には容易でなかった。たとえわれわれが、自然主義的な観点から、死においては単に生理学的な過程が問題であるにすぎないと洞察するとしても、死はやはりわれわれにとって、元に戻すことはできないという不快な性質を持っている。一度永久に目を閉じた人は誰も、元の生命を取り戻すことはできない。宗教は〈再生〉〈復活〉等々への期待を込めて個々人を慰めようとしている。場合によっては、自然主義者にとって、死はもともと何ものでもない、と述べたギリシアの哲学者エピクロス（前 342 [341]-271 [272]）の態度が考慮に値する。すなわち、ある人が生きている限り、彼自身の死は彼には何の関係もないし、彼が死んだ場合は、彼自身は死について何も知らないのである。

### 3) 種の絶滅

ダーウィンは、個々の種の〈寿命〉を決定する法則は存在しないように思われる、と述べた。今日的な観点から見ると、種は所与の〈寿命〉を示しており、その〈死〉はプログラムされている、ということの根拠は見出されない。このことが、個体の死と種の絶滅との間の根本的相違である。もちろん、幾つかの種はとくに〈寿命が長い〉。われわれはそれらを生きた化石あるいは半永久的な属として知っている。その事例としては、ナイルワニや中国の太古の針葉樹イチョウがある。それらは何百万年も前からほとんど変化してなく、それらの祖先種の化石に似ているので、ダーウィンの〈漸進説〉、つまり、進化は非常に緩やかに連続的に行われるという考えを支持する。もっとも、それと反対の事例も存在する。最近とくに有名になったのは、ヴィクトリア湖及び他のアフリカの湖のティラピア〔アフリカ産カワスズメ科ティラピア属の淡水魚〕である。ここでは、様々な調査に基づいて明らかになったこととして、ヴィクトリア湖でこの淡水魚のおよそ 500 種が僅か 10 万年以内に発生したことが挙げられる。これはまさに爆発的な発生であり、非常に高い進化速度を示す模範例である。

さて、現代の進化生物学によって、ダーウィンによっても引用された、古い自然哲学的格言「自然は飛躍しない」ということが確証される。なぜなら、進化においては実際に、何ものも一夜のうちに発生することはないからである。しかし、進化は極めて相異なる速度で行われるのは明らかである。ある場合は緩やかに、他の場合は速やかに行われるが、とくにそれは生態学的な大枠の条件に依存するのである。同様に、いかなる種もいわば永遠不変のものとして発生することはないというのは明白である。どの種も、地球史的観点から考察すると、単に一瞬だけの所産である。種の絶滅は完全に正常な現象なのである。もちろん、一般的な絶滅の原因、個々の種や属の特殊な絶滅の原因については、繰り返し考えられ推測されてきた。

例えば、一定の食物ニッチへの種の特殊化は、もしこのニッチが気候変動によってもはや自由に使えなくなるとしたら、種の絶滅の原因となり得るが、それは理解できることである。いかなる種も、恒常的な世界に永久に生き続けることはない。それ故、特殊化して、その都度の環境にうまく適応している種こそまさに、とりわけ危険にさらされている。〈適応者〉は短期的ないし中期的のみに成功するが、長期的な成功の機会はないのである。様々なニッチに慣れ親しむことができ、とくに食物に関してあまりえり好みがないような、いわゆるゼネラリストが基本的に成功する。ここでは、とくにネズミを考えてみる。ネズミは、生態学的な特殊化のレベルは極めて僅かであり、それ故、様々な生活空間にまさに凄まじく広がるのである。

永久に環境に調和しているような〈完全〉な生物種は存在しない。なぜなら、どの生物も、あらゆる時代とあらゆる生活状況に合うように調整されてはいないからである。ダーウィンは決定的な仕方では、静態的な世界像に代えて動態的なそれを置き換えた。この動態的な世界像の中では、ゲーテ (1749-1832) が探求して発見できると信じた、不変の硬直した〈原型〉とか、植物と動物の原像とかの入り込む余地はない。それ故、たとえ進化は全体として、およそ 40 億年前の生命の発生以来、決して停止状態に至ったことはないとしても、種や属

の絶滅は通例であり例外ではない。そのため、進化は、「個々のエピソードと主人公は交代するが、決して中断することのない連続小説」とも比較され得る。この場合、進化における〈通常〉の種の絶滅と並んで、繰り返し大量絶滅の段階も起こる。この大量絶滅においては、個々の種だけでなく、全生物群（綱や門）も消滅するのである。そこで、約6,500万年前の恐竜の絶滅をどうしても思い起こさざるを得ないが、しかしこれは、進化史上の最大の破局というわけではまったくない。すでに2億5,000万年以上前に大量絶滅が起こったが、この時には全海洋動物の80%以上が消滅した。カンブリア紀以来、つまり過去5億年間に、総じて5回の生物大量絶滅という破局が起こったが、その都度、無数の生物種と全生物群が犠牲となった。これらの出来事の原因については依然として議論が続く。気候変動や地球への小惑星の衝突あるいは様々な要因の複合作用によって、その都度の大量絶滅が引き起こされたのかもしれない。

絶滅は新しいものに席を譲るために不可欠である、と言うことができる。この問いは魅惑的である。われわれは絶滅に意味を付与する傾向があるのだ。すなわち、こんな風に。「もし恐竜が絶滅していなかったとしたら、われわれ人類は今日、高い確率で存在していなかっただろう。というのは、当時すでに生存していた哺乳類は——陸地や河川、空中に生息していた——爬虫類の優位の下で、惨めな生活を送っていたが、もし爬虫類が引き続き支配していたとしたら、哺乳類はそうした生活から抜け出すことはほとんどできなかっただろう」と。しかし、恐竜は、哺乳類が繁栄することができるために絶滅したのではなく、単に運が悪かったにすぎない。事実としては、巨大な隕石が地球へ衝突し、地球を揺るがせた。長く続いた激しい火山の爆発と地震によって、途方もない規模の破局的な気候変動が引き起こされ、恐竜は結局のところ次第に姿を消して行った。それ故、事態はまったく違った現れ方になっていたかもしれない。なぜなら、いつ、何処で隕石が衝突するかは、あらかじめ決定されていないからである。宇宙では、隕石や小惑星がひっきりなしに降り注いでいる。それらが地球へ至る途上でちょうどよく燃え尽きるとしたら、地球に住む者に

にとってはもちろん無害である。しかし、およそ 6,500 万年前の隕石の衝突は、哺乳類が登場するための場を、そしてついにはわれわれ人類にとっての場を提供するために、恐竜にとどめを刺すことが意図されていたと信じるとしたら、そのためには幽霊形而上学に依存しなければならない。単に自然淘汰のメカニズムのみが一つの種の幾つかの変種を〈優遇〉し、他を除去する。そして、様々な自然現象によって、様々な種と属、綱と門が消え去ることになる。進化は絶え間ない生成と消滅を意味する。たとえ新しいものがしばしば、古いものが消え去る場合にのみ発生し得るとしても、新しいものに場を譲るために古いものが絶滅するのではない。一方で、太古の発生拘束（バウプラン [系統発生史的に同一である共通の特徴の総体]）は多く今日まで保持されてきた。いまだになおバクテリアや他の単細胞生物が地球に住み着いており、それどころか、〈過密状態にある〉。つまり、それらの生物の発生拘束（バウプラン）は 30 億年以上前からほとんど変化していないのである。

種の絶滅は進化においては避けることのできない過程である、とわれわれは確認しなければならない。進化は変転と力動性を意味するので、それはいつも同じ役者で演じられるわけではない。ただし、その都度の役者の数は固定されていないし、また、役者のうちのどれだけがその都度同じ時期に出現するかということは何処にも書かれていない。しかし、そのことにわれわれは驚いてはならない。というのも、進化においては、シナリオライターは存在しないからである。

## 4 「第 3 章 すべての単なる偶然か？」の議論

### 1) 世界の予測（不）可能性

世界に起こるすべては偶然と必然の結果であるということは、すでにデモクリトス（前 460-371）が知っていた。しかし、偶然と必然は相互にいかなる関係があるのかという問いは、以前から人の心をかき立てており、もちろん、進化論においても重要な役割を果たす。かなりの数の出来事は予測可能である。

それらの出来事は、抽象的だが経験によって十分追体験できる法則性に、例えば、てこの法則、万有引力の法則、落下の法則等々に従う。もしも万年筆やコーヒーカップ、他の何らかの物体が手から滑り落ちた場合はいつでも重力の法則が作用する、とわれわれは期待してもよい。物体は床に落ちる（物体は残念ながらしばしば砕け散る）。逆のことが起これば、われわれはびっくり仰天するだろう。われわれの世界では、結局すべては正常に進行するはずである。奇跡を信じる人々でさえ一般に、彼らの経験に一致する規則正しさを頼りにするのである。

しかし、多くのことは、われわれが予期することなしにも起こる。だから、われわれは偶然について語るのである。この概念を特徴付ける少なくとも三つの意味が考えられる。第一に、原因が極めて複雑で広範囲に及び分析し難いような、稀有な出来事である。第二に、例えば、一つのゲームで4、5回連続して同じ数が出るような、同じ出来事の連続である。第三に、あらゆる法則性から独立な出来事である。しかし、そもそも〈原因となる〉ものがないそのような出来事は奇跡であり、この世には存在しない。だが、自然主義的な世界観は奇跡を排除する。自然において起こることは、たとえ幾つかの過程が説明に手こずるほどに複雑であるとしても、自然における原因を持つのである。

日常生活におけるわれわれにとって、偶然とは結局、われわれが予期せずに、単にわれわれに〈転がり込む〉すべてのものを意味する。もちろんこの場合、偶然は決してつねに危険をはらんだものというわけではない。偶然の、つまり予期せぬ電話によって、われわれは気分的に晴れやかになったり、あるいは、結果的にわれわれの人生を積極的なものに変えるような、新しい可能性さえ突然提供されたりする。空港へ行く途中での自動車のエンジントラブルによって、われわれは飛行機に乗り遅れることになる。これは腹立たしいことだが、この偶然のお陰で生き延びた人々もいたのである。というのは、乗り遅れた飛行機が墜落したからである。

われわれ人間は一般に、それぞれ独自の因果連鎖を持つが、一見して隠れた

ままであるような、二つないしそれ以上の出来事の出会いとくに驚嘆する。われわれのうちの幾人かはそのような場合に、かのが出会いが意図されていると言われる、不思議な運命の糸を想定する。実際にそのような想定は、事実そのものへの不満足、つまり、あらゆる出来事は多くの場合、ありそうもないことが完全に欠けているわけではないという事実への不満足から出てくるのである。例えば、誰かが人生において二度も、宝くじで大当たりを手に入れるということもあり得る。これは確かにありそうもないが、不可能でもない。この誰かは単にありそうもない幸運を持つのである。逆に、ありそうもない不運を持つ人間もいる。例えば、彼は人生において何度も身ぐるみはがされる難に遭い、その上、繰り返し交通事故に巻き込まれるという具合である。もちろん、そのような人間は、場合によっては、自分自身の行動によって様々な苦痛を招くということも明らかにされる。しかし、ある人に降りかかる多くのことを、この人が制御することは不可能だろう。というのも、彼は単にあらゆることを予見することはできないからである。

フランスの数学者・天文学者ピエール・シモン・ド・ラプラス (1749-1827) が考案したデーモンは、世界における偶然の存在を否定する。それはすべてを知り尽くしている。このデーモンないし悪魔は、少なくとも所与の瞬間において、世界を司るあらゆる力並びに相互関係にある現実世界のあらゆる構造を知っており、その上、最小の原子も最大の天体も分析することができるのである。この思考実験がどれほど心をそそるものであるとしても、それにはやはり難点がある。つまり、ラプラスのデーモンは不可能だということである。われわれの世界は明らかに極めて複雑な構造をしているので、最小の原因が予期せぬ最大の結果を引き起こすこともしばしばである。われわれはとくに、いわゆる連鎖反応の現象でそのことに気がつくのである。

われわれの世界において物事はつねに尋常に進んでいるとしても、ラプラスのデーモンにとって物事はあらゆる観点で予測可能というわけではないだろう。また、われわれにとっても決してそういうことはない。もちろん、自己組

織化の概念によって、われわれには複雑系の記述が可能となる。この複雑系は、一定の初期条件及び大枠の条件の下で自発的に秩序を構築し得るし、またその際、決定論的な法則に従うことはない。こうした系はとくに生物であり、社会及び文化の発展を伴う人間である。例えば、多くの人間の共同作業によって、一定の状況下で社会的及び政治的な新秩序が実現される。人間の社会史及び文化史はすべて計画されたものとは違っており、自己組織化の過程の長い連鎖として出現するに違いない。いずれにしろ、われわれは隠された運命の糸なるものを想定する必要はない。そうではなく、複雑系は、後になって初めて一定の方向性を認識させるような、独自の力動性を示すということをありありと思ひ浮かべさえすればよいのだ。今日、極めて人気のある〈カオス理論〉によれば、自然と社会におけるあらゆる系には確かに一定の法則性が根底にあるが、この法則性はそうした系の不規則な、長期的に予測できない振る舞いを可能にするということも明らかになる。誰もがよく知っている事例は天候の変化であり、これは非常に多様な要因が影響しているので、様々な要因の作用は見通すことができない。それ故、経験豊富な気象学者でも短期的な予測だけが可能である。しかしその場合でも、その予測はいつでもご破算になり得るのである。

生物の進化も、全体においても部分過程においても、非常に複雑で混沌とした過程である。自然淘汰の理論を用いてダーウィンは、われわれが十分に仕事をすることができるような説明を、また、何らインテリジェントな計画がその根底にあるわけではないけれども、進化はなぜ後になって〈方向付けられた〉と思われるのかを理解させるような説明を、提示した。

## 2) 進化はいかに起こるのか？

われわれの周りのすべてが変化することは明白であり、先史時代の祖先にも理解されていた。しかし、変化は必ずしも〈進化〉を意味しない。幼生から大人の動物への変転は個体的発展の過程であり、その過程によって素朴な観察者は、あらゆる種の一度限りの創造への信仰を持つに至る。19世紀まで、



個々の生物は他の生物からあるいは無生物から自然に発生するだろうと信じられていた。〈自然発生説〉と呼ばれたこの見解は妙な結果を生んだ。例えば、ガやウジ虫は泥から発生したのだろうとか、ネズミは小麦の穀粒と結びついた汚れたシャツの臭気から発生したのだろう、と想像された。こうした想像は、進化という意味での種の変転の考えとは何ら関係ない。それはむしろ、[赤ん坊を運んで来るとされる] コウノトリのおとぎ話を思い起こさせる。

さて、西洋の思考は二千年以上にわたって静的な世界像に支配されていた。この世界像を、旧約聖書の創世記に固執しこれを文字通りに解釈する人々が相変わらず信奉している。個々の有機体における変化の知覚、あるいは、泥やその他の〈物質〉からそのような個体が自然発生するだろうという信念は、静的な世界像と完全に一致していた。ところが、進化論の確立とともに、巨大な精神革命が遂行された。今日生きている生物種は全能の創造主の手から創られたのではなくて、自然の原理に基づき漸進的に発展したのであり、〈異なった種類〉の祖先に由来するという認識は、その意味と帰結において、おそらく人類にこれまで賦与された精神的な高みを凌駕している。もしわれわれが事実として進化を注視してみれば、とくに、種はなぜ不変のままではなくて、絶え間なく変化するのか、という問いが前面に出てくるのは明らかである。別の仕方で問うとすれば、進化はいかに起こるのか、ということである。

最初の満足できる回答を提供したのは、自然淘汰の理論を用いたチャールズ・ダーウィンである。もちろんダーウィンの問題点は、彼が遺伝のメカニズムについてはまだ僅かしか知らなかったということであった。そのメカニズムの分析は後に進化生物学において際立った役割を演じた。それ故、人気のある新聞雑誌において、またダーウィンと彼の理論をめぐる多くの公開の場での討論において、今日なおこのイギリス人が淘汰と突然変異による進化を説明したと主張される場合、そのことは、ダーウィンが突然変異（つまり、多かれ少なかれ遺伝組織の飛躍的な変化）について何も知らなかった限りで、根本的に間違っている。〈突然変異〉—— 自然発生的に現れる遺伝的な変異 —— という表



現は、オランダの植物学者ユーゴー・ド・フリース（1848-1935）において初めて導入された。もっとも彼は、突然変異という過程そのものを進化のメカニズムとして過大評価した。確かに突然変異は種の進化的変化において役割を演じるが、もっと重要なことは、両性の繁殖過程での、あらゆる世代における遺伝子組み換えないし遺伝物質の新秩序なのである。

幾つかの生物——例えば、湿った生物生息空間で成長するごく小さなワムシ——が性の区別なしで生きている、つまり無性的に増加するということは別の事柄であり、それはもちろん、遺伝子組み換えの意義を全体として断ち切るものではない。（動物界では圧倒的な）両性による繁殖で生まれる子孫はつねに、両親の遺伝的な潜在能力の混合による結果である。以前は、両親及び若干の近縁親族の遺伝因子が子どもたちにおいて単純に合算される、と考えられていた。

しかし、それは今日でも同様である。乳飲み子をじっと見つめてみると、幾つかの深い洞察が得られるのだ。すなわち、その子の鼻は父親譲り、微笑みは母親譲りといった洞察である。ダーウィンはしかし、遺伝的知識が不足していたにもかかわらず、事態をもっとよりよく知っていた。すなわち、個体は比類ないものである、と。個体は単に祖先たちの総計ではなく、まさに新しい変種なのだ。自然淘汰にとっての根本材料を提供する遺伝子組み換えによって、個体の巨大な多様性が生まれる。進化を推し進めるのは遺伝的な差異である。種のあらゆる個体が遺伝的に画一であれば、淘汰による進化はあり得ないだろう。価値があるのは、（遺伝的な）変異であって、つねに同一の遺伝因子を保持することではない。

ここで重要なことは、あらゆる世代における遺伝子の新しい組み合わせは偶然に起こるのであって、混沌とした過程に等しい、と確認することである。進化は、相互に独立の二つの要因ないし要因の複合に基づく。第一に、とくに遺伝子組み換えによる、またそれに加えて突然変異による、方向性なく偶然に起こる遺伝的変異の産出に基づく。第二に、自然淘汰に基づく。これは、偶然に

生まれた豊富な変種の中から、その都度の生活条件に他のものより相対的によく適応したものを優遇する。それ故、進化はいわば二段階の過程であることが分かる。この場合、淘汰によって初めて方向性が与えられるのである。

もちろん、この〈方向性〉は目標と混同されてはならない。例えば、恐竜の絶滅後に哺乳類がいかなる方向性をとるのかは、決して初めから確定されてはいなかった。全体として、進化において成立した生物の秩序は、ライプニッツの意味での予定調和の帰結としてではなくて、〈後から安定した調和〉の帰結として見られなければならない。結果はすでにその条件によって確定している、と信じる過ちをごく簡単に犯すことがある。しかし、進化において、方向性としてわれわれに思われることは、無数の淘汰過程の結果であり、それはまったく違った結果にもなり得ただろう。自然淘汰も厳密に決定論的な過程と見られてはならない。一定の変種の除去あるいは促進には、一連の偶然的要因が貢献する。不都合な天候条件、洪水、火山の爆発などは役に立つ変種を除去するかもしれないし、さらにまた、少数の個体群における有利な遺伝子が偶然に失われるかもしれない。

### 3) ダーウィンは（やはり）正しく洞察した

器官や機能、行動様式の全体が適応として理解されるという考えは、これまで繰り返し批判者によって問題にされていた。もちろん、魚やクジラが水へ適応していることや、土掘りシャベルに形を変えたモグラの前肢は土壌内で土を掘る生活様式へ適応したものであることを、誰も疑うことはない。他方では、特有の前肢によって初めて、モグラは地中で前方へ進むことができるし、これによってのみモグラの生活様式は可能となる。ただ問題があることも予感される。ダーウィンもそう予感したので、次のように述べた。「自然研究者はたいいてい気候、食物等のような外的条件において、唯一可能な変異の根拠を見る。ある意味でこれは……やはり正しい。しかし、例えば、キツツキの形態、樹皮の下の昆虫を取り出すのに見事に適応しているキツツキの足、尾羽、嘴、舌の

形状を、単に外的な原因のせいにするのは間違いである。」

それ故、適応はすばらしいものだが、それには外部要因によって押しつけられることのない、生物の〈適応能力〉が前提となる。クジラとイルカは、有蹄類に似た陸上哺乳類に由来し、水中での生活に最適に適応することによって、およそ5千万年前から独自の発展を遂げた。しかし、すべての任意の有蹄類がすんなりと水中での生活に移行できるわけではない。クジラの場合、化石の発掘によって、海水中で水かき運動で泳ぐ属も、陸上で這って進む属も、それ故、陸上哺乳類と水生動物との間の〈連結環〉も証明される。その上、クジラとイルカは幾つかの哺乳類の特徴——子どもの授乳、肺呼吸、温血——を維持した（結局、それらは哺乳類に留まった）。逆に、水中で生活する任意の（脊椎）動物がすべて陸上生活者になり得るとは思い浮かべることができない。その生活空間が干上がった魚は、外部の圧力の下で、簡単に陸上生活の四足動物へ変わるということはあり得ない。およそ3億6千万年前の動物による〈陸地の征服〉によって、かなり明確な〈魚類状〉の生物が登場した。これはその生物にとっての解剖学的な三つの前提を満たしていた。すなわち、丈夫に作られたひれ、内部の鼻の開口部、肺胞である。ところで、今日でもなお、両生類の特徴を備えた魚が生息している。すなわち、熱帯のマングローブ湿地に出現するトビハゼだ。これは、貧相で長く伸びた胸びれを持ち、その他幾つかの特徴のお陰で水の外でも1時間までは持ちこたえる。逆に、最初の両生類は、対応する化石の発掘から明らかなように、まだ魚の多くの特徴を示す。そこから明らかになることは、生物の新しい組織形態は突然に成立したものではなくて、長期の〈改造〉過程の結果であり、この過程にダーウィンの漸進的進化のモデルがぴったりと当てはまるのである。

それ故、生物の外界の側面から見た自然淘汰と並んで、〈内的淘汰〉が想定される。もちろんこれは、以前にしばしば想定された生命力とは何ら関係ないもので、生物の領域で根本的な、自己組織化ないし自己維持の原理を表す。言い換えれば、この場合、生物の構成及び機能の条件全体が問題となるのである。

一つの事例で具体的に説明しよう。

陸上に生息する種の節足動物は、ザリガニ、クモ、ムカデ及び昆虫など、包括的な動物界の門をなすが、体部の大きさは相対的に僅かしかない。節足動物は、脊椎動物と同じく、内骨格を自由に動かすことはできない。それ故、とくに陸上に生息する場合（節足動物のたいていはそうである）、かなり小さくて軽い身体構造のみが〈耐えられる〉。節足動物の体部はキチン質の甲冑で覆われており、その重量もまた体部の大きさを制限する。

以上の事例によって、進化において外的条件が内的条件を伴うということがよく示される。ダーウィンは、ほんの僅かしか遺伝に関する知識を持ってなくて、種の変化は非常に緩慢で徐々にしか行われなければならないという考えを抱いていたので、進化に関する一面的な見方を示したが、たとえそうだとすると、彼は進化的変化とその都度の帰結を単に外的要因のせいに、つまり外的淘汰のせいになかったという点で、正しかった。彼はまた、生物の個々の部分はいわば相互に適応しており、個々の部分のうちの一つの変化は有機体全体にとっての帰結をもたらすと見た点でまったく正しかった。それ故、生物の個々の部分も任意に変化することはあり得ない。あらゆる有機体の構造は相互に環境となり、相互に制御し合う。不釣り合いに大きく発展した構造によって、それがしばらくの間は完全にその機能を実現するとしても、とりわけ変化する環境条件と生命要求の下で、当該の有機体ないしその種の生命力が失われることになる。その一つの事例が、（絶滅した）剣歯虎〔サーベルタイガー〕の強力に発達した犬歯である。

次に、進化に対して繰り返される異論とそれに対する反論を列举して、ダーウィンの進化論を擁護しておこう。

**a)** 進化は証明されない——間違い：進化に関しては、生物学及び周辺分野の全領域から、圧倒的に豊富な経験的証拠がある。植物の栽培や家畜の育種並びに様々な実験（突然変異の実験）が、進化過程を理解する直接的な通路さえ提供する。今日では、コンピュータシミュレーションも手掛かりにな

る。

- b) 進化の目撃者は存在しない——取るに足りない：古代エジプトのファラオの場合も目撃者は存在しないが、誰もその存在を疑わない。歴史家にとっては筆跡、絵画、建造物等が歴史的過程の再構築に役立つ。進化生物学者にとっては現存する生物、化石等が進化史的過程の再構成に役立つ。
- c) 移行形態の欠如のため、進化によるものではなく、創造行為によるものとされる——間違い：かなり多くの移行形態が存在する。最も有名な事例は、爬虫類と鳥類の連結環としてのアルカエオプテリクス属の始祖鳥であり、これについては幾つかのサンプル化石が伝えられている。移行形態の欠如は単に化石提供に欠陥があることの間接的証拠となるものであって、創造行為の想定を正当化するものではない。
- d) 〈盲目的な力〉としての淘汰は生物の秩序を説明することはできない——間違い：進化が行われる長い期間においては、淘汰は非常に多くのことを引き起こすだろう。その上、基本的な自然法則が働くので、例えば、立方体のサメや4mの大きなアリが生まれることは決してない。結局のところ、進化は、環境条件と、生物体の構造的・機能的条件との間の複雑な相互作用として理解される。
- e) 自然はインテリジェントな計画者を指し示す——間違い：種の狭い特殊化によって引き起こされた、進化の多くの袋小路は、インテリジェントな計画者よりもむしろ、やっつけ仕事をする人を想起させる。インテリジェントな計画者であれば、彼はどのように、かつて存在したあらゆる種の99.9%が再び絶滅することを許容したのか。彼はどのように、あらゆる生物種を完璧に創ることを直ちに行わなかったのか。彼はどのように、〈賢い〉種である人間が自然を破壊し、そのために自ら足下の大地を取り除くようなことを許容したのか。
- f) 生物体のあらゆる構造と機能が適応として説明されるわけではない——取るに足りない：すべてが適応というわけではないということをすでにダー

ウィンが知っていたように、生物は単に適応するのではなく、その環境をも変える能動的なシステムである。生物は恣意的に適応することはできない。例えば、カバは何らかの新しい環境の必要に適応するために、翼を発展させることは決してできないだろう。

- g) ダーウィンは進化のあらゆる問題に満足に答えることはできなかった——取るに足りない：物理学のあらゆる問題を解決した物理学者も存在しなかった。ダーウィン以来、進化生物学は、進化に関するわれわれのイメージを次第に完全なものにする、無数の個別知識を獲得した。
- h) 未解決の問題や論争の存在によって、進化は事実ではないと推測される——間違い：個々の現象に関して、その説明に問題があったり、意見の対立があったりすることによって、進化の事実そのものは何ら変更されない。
- i) 人間の精神的な性質の出現は、進化論によって説明されない——間違い：反省的な自己意識、象徴言語などのような現象も進化過程の連続性の中に含まれる。われわれの様々な精神的性質は、他の動物においても前段階として存在した。これらは、あらゆる他の器官と同様に、進化において自然淘汰によって成立した、複雑な脳の性質である。精神的な発展は有機的な進化に対して独自の力動的な経過を示すとしても、前者は後者と不可分に結びついている。精神的なものは、自然から離れた自立的な領域では決してない。

#### 4) 偶然と、発展の必然性

ダーウィン以来、生物進化に関するわれわれの考えはたえず改良された。その際、遺伝学だけが重要な認識を提供したわけではなかった（たとえ遺伝学がその専門分野によって、近年、生命科学においてかなりの程度支配的であっても）。生物の構造、機能及び行動様式に関する研究は、これまで重要であつたし、現在も同じく重要であり、幾つかの点で一層重要である。とくに今日、進化は決して単に〈外から〉操られる過程ではなく、生物自身がいわば口をはさむべき一言を持っている過程である。適応パラダイムはずっと前に修正され

ねばならなかった。生物は、生物への環境の作用がどれほど大きいとしても、自らの側で環境に働きかける能動的なシステムである、ということはすでに定説である。生物は、環境の影響に単に身を任せるのではなく、自ら環境を利用するために様々な活動を起こす。例えばここで、ビーバーのダム、シロアリの蟻塚、鳥の巣を思い起こせばよい。

人気のあるのは、進化を宝くじの賭けと比較することだが、この宝くじの場合も若干の規則があるように、進化も恣意的に行われるのではない。いったい誰が、どれだけ長く賭けを行うかは、幾つかの(制限的)要因によって決定されるが、この要因は、その複雑さにおいては、もちろん、あらゆる宝くじの賭けの条件をはるかに上回っている。進化においては、多くのことが可能だが、しかし、すべてではないのである。外的淘汰と内的淘汰の相互関係によって、その都度の進化の変動幅が制限される。一度確立された構成によって、当該の動物や植物のその後の発展の可能性は制限される。ゾウやサイ、カバは、飛ぶ運動様式が好都合だとしても、翼を発達させることはできない。しかしコウモリは、哺乳類の中でまさにこの(発展の)道を選んだが、厚皮類(ゾウやサイ、カバ)のサイズと重量を実現することはできない。

このことは、同時に、偶然に成立した構造は合法則性に服する、ということをも意味する。その合法則性とは、またもや一つには、外界の合法則性であり、さらには、生物の構成条件から生じる合法則性である。生物にその都度独自の〈建築術〉は、それ自身つねに多かれ少なかれ複雑な進化過程の結果であるとともに、さらなる発展の可能性に重大な影響を及ぼす。いったん確立された設計図は長い間にわたって保持されるということは、原則的に妥当する。これはいわば進化の保存的側面である。コウモリやクジラは、それらの特殊な現象形態ではもはや哺乳類を想起させないとしても、それらの根本特徴を見れば哺乳類のままに留まる。すなわち、コウモリが鳥に、クジラが魚に変わることはないだろう。

もちろん、類似した構成は進化においては、系統発生史的にも類縁関係の面



でも相互にはるかに隔たっているような、相異なる生物集団の場合にも繰り返される。こうした〈類比〉と〈収斂〉として知られた現象——例えば、昆虫、翼竜、鳥類、コウモリにおける羽、あるいはサメ、魚竜、イルカ、海牛における流線型構造——は、幾人かにとっては小さな奇跡という感じを与えるかもしれないが、またもや、単に〈ご都合主義的な発達〉を表現するものである。一定の（生態学的な）大枠の条件の下では、同一のあるいは類似した構造（機能と構造様式）が有利である。例えば、鳥類とコウモリが相互に類似して見えることを何らかの秘密の計画者が望んだからではなく、非常に一般的に言う、羽を持っている鳥類とコウモリにとって共通の形態が有益であるから、これらの動物の羽が〈成長した〉のである。もちろん、羽の発達の可能性は生物自身の構成条件にも依存する。（空飛ぶゾウやサイを待ち望んでも無駄だろう。また、翼のある天馬、ペガソスはギリシアの神話の中に留まっている。）

さて、合法則性は偶然の作用を制限する。しかし、その合法則性は何らかの高次の意図の表現ではない。誰もゲームに参加するようには強制されない。しかし、ゲームに参加する人は一定の規則に従わなければならない。〈生命のゲーム〉の場合、最初から確定されているのは単に僅かの規則でしかない。それは、重力の法則とか自由落下の法則のような基本法則であり、いかなる生物もその法則から逃れることはできない。あらゆる他の規則ないし合法則性は、河が自分自身の川床を掘るように、自分自身を誘導する過程として、進化そのものを形作る。

## 5 「第4章 インテリジェントでないデザイン」の議論

すでに述べたように、進化と不可分に結びついた種の絶滅という現象からは、もしこの世界を創った計画者があるとしても、それは単に、かなり組織性のない、混沌とした計画者で、その上非常にご都合主義的に行動する、つまりインテリジェントでないと推測される。例えば彼はクジャクのオスに、メスの面前で〈輪の形〉をなして〈誘引器官〉として役に立つ、華麗な長い尾羽を与



えた。最も長くて最も華麗な尾羽を備えたクジャクのオスは、ライバルのオスを凌駕して、メスをそれ自身で獲得し成功裏に繁殖するという最良の機会を持つ。(ちなみに、いわゆる性淘汰というこうした現象を、すでにダーウィンは非常によく知っていた。)ここまではそれでよい。それでは、われわれは何のために、インテリジェントでない〈計画者〉(淘汰)が同様に実現させる現象についての〈説明〉のために、わざわざインテリジェントな計画者を必要とするのだろうか。

しばしば人間は、進化の目標として、進化の完成形として見られたし、見られる。進化全体を人間に向けられたものと見て、人間を進化の頂点として考察するためには、われわれは両眼を固く閉じなければならない。つまり、生命は30億年以上にわたって、単に結局は人間の登場を可能にするために、難儀な道を開き、何百万もの数え切れない種を失ってきた、と言われる。もしそうであるなら、創造ないし進化の王冠と誤って思い込まれたものは、実際の場合とはまったく異なったあり方をしているに違いない。人間はその体型において、インテリジェントな計画者を何ら推測させないような、様々な特徴を示す。すなわち、ホモ・サピエンスの直立歩行は不快な付随現象を持つ。直立歩行は脊柱に負担をかけ、とくに長時間座って過ごす文明人の場合、そのために繰り返し苦痛を覚える椎間板障害に至るのである。二本足の人間としてわれわれはまた、様々な状況の下でつまずいたり倒れたりする危険にさらされており、そのため、苦痛を覚える負傷、また時として致命的な負傷を招くことになる。

ダーウィンが自然淘汰によって進化の理論を根拠付けてから、多くの人々がこの理論と闘った。なぜなら、進化は意図も目標も知らないということ、そしてそれ故、進化は人間をも必然的に作り出したわけではないということは、とくに彼らには理解できないことだからである。敬虔な自然神学者の理念に根ざした、インテリジェント・デザインの考えは、今日、アメリカ合衆国だけでなく、またもや多くの信奉者を持っている。その理由は、心理学的、社会政治的及び道徳的な性質のものである。

## 1) 計画と目標のない進化

多くの自然研究者と哲学者にとって、極めて長い期間にわたって非常に大きな意義を持っていたのは、自然における進歩と完成の思想である。この思想は進化論以前の思考においては、神の計画と結びつけられた。ところが、進化的思考の枠内でも、神の計画という理念なしで、その魅力は保持された。ダーウィンも進歩の理念に影響を受けていた。また、ダーウィンの雄弁な代弁者かつ擁護者トマス・H・ハクスリ（1825-1895）も、進化的進歩は神の計画とは何ら関係ないという確信の下に、進歩の理念を受容した。〈インテリジェント・デザイン〉の代表者たちは今日、自然における計画と完成という考えによって、ダーウィン及びハクスリ以前の時代へ逆戻りするのである。

インテリジェントな計画者という考えの問題点は二重にある。第一に、それは何ら科学的な説明を提供しない。第二に、それは自然の〈不完全性〉に相応しくない。もう一度、絶滅の問題を考えてみる。この絶滅の問題こそ、インテリジェントな計画者であれ、世界建設者であれ、あるいは〈彼〉を何と呼ぼうとも、そうしたいかなる存在者の理念にも反対する最も強力な議論である。何らかの形で聖書の創世記の記述に固執するあらゆる創造主義者の場合と同様に、〈インテリジェント・デザイン〉の代表者の場合も、そこで確認されるのは、この間にかかなり片付けられた思考パターンである。創造主義者たちは生命体の領域で何らかの問題を取り出し、それを進化一般が起こったかどうかという問題と結びつける。その後、彼らは、進化生物学の下で具体的な問題解決に関して不一致点が存すること、例えばダーウィンの漸進説は十分な解決とはならないこと、を見るだろう。そして彼らは、進化に反対する議論と、種の恒常性ないしは種の神的起源を支持する議論を提出する。この場合の根本的な思考上の誤りは、容易に認識することができる。すなわち、もしある現象が十分に説明されないか、その説明に関して意見が分かれるとしても、現象そのものには何ら変わりはない。そして、もし進化論が何かをまだ十分に説明しないとしても、すでに言及した理由により、インテリジェントな計画者はなお説明

とはなり得ない。

多くの人々は、相変わらず、秩序は何らかの計画者なしでも成立し得るということに関して、困難を覚えるように思われる。ところが、自然は至る所でまさに非常によく機能していることは明らかである。例えば、比較的長く続く暴風雪を考えてみよう。もし空がその後で再び晴れると、砂丘に似た、様々な高い雪庇が形成されるのが見られる。幾つかの場所は実際に雪がないままであるが、他の場所では雪が非常に高く積み重なった。つまり、そこに一定の秩序パターンが認められる。その背後にはどんな意図が隠されているのか。何の意図もない。むしろ、非常に単純な物理学的熟考によって、われわれは、雪はどうしてあれこれの配置になるのか、という問いに対する回答に至るのである。それに代わる回答として出されるのが、何らかの風の神や雪の神の想定となるのだろう。もう一つの事例はつららである。その発生はとりわけ気温に依存する。つららが下方へ丸くあるいは尖って形成されるかどうかは、つららを形成する滴と風の影響とに依存する。つらら形成の過程の背後に意図があると真面目に推測する人はほとんど誰もいないだろう。

確かに、生命体の進化においては、事態ははるかに複雑である。しかし、進化には、非常に巧妙に構成されたあらゆる種の場合に、どれほどの時間がかかるかということは、忘れてはならないのだ！

進化的思考の批判者及び創造主義者は、眼のような複雑な器官を好んで指摘する。ダーウィンはこの問題を意識していたので、次のように述べた。すなわち、「無比無類の装置を備えた眼が……自然淘汰によって成立したという想定は、私が率直に認めるように、極めてばかげたことと思われる。」しかし、ダーウィンは彼独自の洞察力によって、この〈不条理性〉を取り除き、眼の発達と彼の（淘汰）理論を結局のところ見事に一致させることができた。こうしてわれわれは今日、比較解剖学的及び生理学的研究に基づいて、またコンピュータプログラムを用いて、——様々な動物集団（例えば昆虫、軟体動物及び脊椎動物）において相互に独立に成立した——光覚器官の進化を再構成するこ

とが一層できるようになった。眼は収斂的發展の進んだ事例であり、〈眼の保有者〉に決定的な利益をもたらした。眼が動物の幾つかの属において、多かれ少なかれ非常に減退していることは、これまた同様にそれらの特別な生活様式によって説明できる。一つの事例はミミズの形をした熱帯の両生類で、たいていは地下で生活している。もちろん、われわれにもっとよく知られているのはモグラであり、これも地下で土を掘りめぐらしており、同様に眼の退化現象を示している。

それ故、進化は、目的に役立つ構造を生み出すけれども、あらかじめ定められた計画なしに進行し、またいかなる意味も持たない。われわれ人間が進化へ、自然へ、意味を投影する傾向にあるということは、単にわれわれ自身のことについて何事かを示しているにすぎない。すなわち、われわれが形而上学的世界像を發展させ、そうした世界像を抱くという能力を備え、自己欺瞞への際立った傾向を有する種であるということについて、である。〈客観的に〉考察すれば、生物学者かつ自然哲学者バルンハルト・レンシュ（1900-1990）が考えたように、「個々人の存在も人類の存在も何ら〈目標〉を持たない。永遠の相の下に考察すれば、全存在そのものと同様に……人間存在は目標を持たない。」ここで、小さな思考実験を見てみよう。

何千もの灰色のウマの群れがあり、そのうち幾つかの個体が幾分違って、少し明るい灰色のウマであるとし、そしてこの特徴に影響し得る突然変異がある、と想定してみよう。さて、誰かがこの群れを百年ごとに訪ねて、その都度、最も明るい色の変種を除去する。このようなやり方を続けると、高い確率で、およそ百万年後には、黒いウマばかりになるだろう。もちろん、この思考実験は逆にすることもできる。百年ごとに様々な灰色の変種を交互に除去すると、新しい色合いのウマの発達が有利になるだろう。しかし、この思考実験は、インテリジェントな計画者の炎の中へ油を注ぐことにならないか。いや、百年ごとにやって来る人と、計画者の精神（霊）とを混同してはならない。自然淘汰と関連した遺伝の規則がこれをたやすくやり遂げる。

しかし、灰色または黒色のウマ、地下で生活するモグラ、空中で旋回するワシ、小さな耳か大きな耳を持つキツネであろうと、それらの動物の構成がどれほど目的に役立っているようにとも、進化論的見地から言うと、その存在の上位に置かれた意味及び全体としての進化の意味への推論を可能にするような動物は存在しない。ところで、人間の登場についてもこのことは当てはまるのか。

## 2) 人間——自然の幸運（不運）な当たりくじ

進化においては、生命を維持するための何百万もの道があるが、今日の人間は、単にこれらの道の一つにすぎない。何重にも呼び起こされた、自然における人間の特別な地位は、ずっと前から、進化生物学的な、そして、他の多くの生物学的な専門分野からの成果によって支持された認識にもはや相応しくない。そうではなくて、その地位は、相変わらず不自然にそれに固執される所において、人間に高次の目的（意味）を付与しようとする、旧来の非合理的な努力の表現なのである。

古代以来の人間の歴史は、とりわけ、過大な自己評価及び過大な自己高揚の歴史である。アリストテレス（前 384-322）が人間を理性的動物と特徴付けたように、人間の特別な能力はこれまでしばしば強調されてきた。人間の精神、悟性、理性、文化は人間の卓越した特徴として強調された。そして、それらは、人間の特別の名誉と見なされた。人間は自らを、あらゆる他の被造物を超越したものと見た。19 世紀にあらゆる生物の類縁関係が明らかになったとき、人間の中に大きな不安が広がった。なぜなら、こうした洞察の結果は明白だからである。すなわち、人間は、無数の生物種の中の単に一つにすぎないということである。人間の文化的な高空飛行はその精神によって成功したが、人間は、彼がそこから離れることのできない、地球上での生命の進化史の中へ埋め込まれている。ダーウィンが明らかにして以来、今なお多くの人々を揺るがす衝撃的な結論は、「人間は低次の有機体に由来する」ということである。

今日では、サルに似た生き物からの人間の由来については、もはや何の疑い

も存在しないだろう。また、細部の幾つかの争点、例えば、その都度の新しい発掘化石の命名と分類の問題にもかかわらず、人間の進化への道は全体としてかなりよく再構成される。だが、ここではその点には立ち入らない。

もちろん、われわれのテーマにとって非常に重要なことは、人間は、もはや被造物の最高位ではないとしても、やはり進化の最高位ないしは目標であるという、相変わらず流布した見解である。われわれの多くにとっては、人間は進化において必然的に登場したのであり、人間とともに、地球上における生命の発展史はいわばその最高点、終結を飾る王冠に達した、というように思われる。その背景には、数十年前の少なからぬ進化理論家によってさえ好まれた、進歩と進化における完成の理念が存在する。またもや、この理念は人間とその生活状況の改良能力への希望と結びついていし、結びついており、その上、強固な心理学的構成要素をも持っている。人間の成立、種としての人間の生成は意図されたものではないという考えは、われわれの多くにはとにかく困難である。われわれの〈低次の由来〉を認める点で意気阻喪させるような洞察を、ダーウィンもある程度は無害化することができると信じて、「進歩が退歩をはるかに凌駕するということ、また、人間は、たとえ緩慢で中断しながらであるとしても、最も低次の状態から、知識と道徳、宗教の今日的な段階にまで高まったということ」は、慰めとなる想定である、と述べた。こうした進歩によって、われわれの種の有利な発展への希望が可能になった。そのため、ダーウィンの支持者の幾人かは、人間には偉大な未来があると予想するきっかけとなると見た。

今日では、いずれにしろ進化論的見地から言うと、このような楽観主義はもはや共有し得ない。人類はいつでも自らの過失によって停滞に陥る。しかしまた、人類が何を行うか、あるいは行わないかに関わりなく、人類が存続するという保証は決してない。なぜなら、人類はとにかく進化から脱出することはできないからである。もっとも、人類がすでに仲間の中で、そして他の種の中で、引き起こした破局は、進化史において、その前例がないほど極めて強大なものである。アルトゥール・ケストラー (1905-1983) は、人間を進化の誤配郵便

物と呼んだ。それは確かに間違いではない。だが、これについてはわれわれの種だけがそうだということではない。これまでに絶滅したすべての種はある意味で誤配郵便物であったし、あるいはいずれにしろ、いかなる理由によっても、その都度の環境の変化に耐えることができなかった。しかし、もう一度、進化を〈調整する〉要因、すなわち自然淘汰が、いかなる長期的な計画も、いかなる目標といかなる意図も知らないということが、われわれに突きつけられるとしたら、以上とは別のことが期待されるわけでもない。

ともかく、ホモ・サピエンスは進化の終結を飾る王冠ではない。自然史において、はるか昔にはホモ・サピエンスは存在しなかったように、未来においても存在する必要はない。人類の没落後も、地球上の生命は——地球が太陽によって呑み込まれたり、宇宙的破局によって消滅させられたりしない限り——何らかの仕方でも発展し続け、新しい種が発生し、そしてまたもや消滅するだろう。ともかく人間は、自然の幸運な当たりくじでもなければ、その不運な当たりくじでもない。なぜなら、自然は〈幸運〉も〈不運〉も知らないからである。たとえ、無数の種のうち若干のものは、もしホモ・サピエンスが存在しないか、あるいは彼が現在ある状態にまで発展しなかったとしたら、確かに難を免れていたとしてもである。現在のホモ・サピエンスは、過度に膨張する種であり、その技術的な能力によって、何らかの形で自分の邪魔をするあらゆるものを取り除き、容赦なく、あらゆる自由に使える資源を、しかも急スピードで搾り取っている。だが、この行動にも進化生物学的には深い根源がある。つねに自らの生存が問題なので、資源の効率的で直接的な確保が優先される。それ故に、いかなる生物も自然保護者ではない。ビーバーが倒す木々のことを気にかけないのと同様に、ゾウも踏み荒らす灌木のことを気にかけない。ただし、人間の場合、その自然環境の破壊は完全に別の次元に達した。チェーン・ソー、ブルドーザー、銃器によって、他の種の個体には自由にならないような可能性が人間に与えられた。もっとも、理性に恵まれた動物は一般に、自分自身の生存の基盤が取り除かれることを考えない、あるいは、ほとんど考えない。それ



故、人間の未来は暗い影を投げかけるものである。

インテリジェントな計画者を信じ、この計画者は人間を、彼の仕事の終結を飾る王冠として創造した、と考える人々は、人間はどれほど残酷でおぞましいことを行う能力があるかを、はっきりと認識すべきだ。この計画者は、彼の〈最高の被造物〉が二度の世界大戦を遂行するのを許したとしたら、いかにインテリジェントであることだろうか。そしてこの計画者は、彼がその被造物に核兵器を手渡したとき、何を思い浮かべたのだろうか。彼はどうして、自己自身及び地球上のあらゆる他の被造物と協調し融和するような、平和を好む生物を創造しなかったのか。

### 3) 〈開かれた〉進化——不確かな未来

未来を〈のぞき見る〉ことは、われわれすべてにとって極めて魅惑的である。また未来学者は、未来へのシナリオを描こうと真剣に努力している。しかし周知のように、未来は第一にシナリオ通りにはならないし、そして第二に思い通りにもならない。われわれが自慢に思う文明がいかに壊れやすいかは、すでに繰り返し明らかにされている。火山の爆発、地震と津波に対してわれわれは対処のしようがない。せいぜい逃げ出すことができるだけだ。そのような出来事の予言は未来においては、気象学的あるいは地球物理学的な観察方法によってもっと正確になるだろう。しかし、出来事そのものは抑えることができないだろう。

進化におけるインテリジェントな計画への信仰は、もしその計画を見抜ければ、未来は計算可能であるという想定を含む。しかし、われわれはいかなる計画も認識できないと考えており、そういうわれわれだから、この問題は少し軽く片付けることができる。すなわち、われわれは未来を〈開かれた〉ままにしておく。進化は直線的な過程ではなく、ジグザグの過程として現れるので、進化を予言することはできない。進化論は、過去に起こった過程を取り扱うので、広範囲に及ぶ歴史的な理論である。もちろん、進化に関連した多くの過程



は現在の生物においても観察できるし、実験的に検証可能である。しかし、進化は〈全体として〉再構成されるにすぎない。それ故、進化理論家は、一方では、地球の成立と発展を理解する地質学者と、他方では、人類の歴史を研究する歴史学者と、それぞれ類似した状況にある。あらゆる歴史科学にとって、方法論的に大まかな規則として妥当するものがある。すなわち、推測による歴史的シナリオが可能な説明として提案され、そしてそれを受けて、たぶんその通りかどうか極めて徹底的に検証される。この場合、英国の地質学者チャールズ・ライエル（1797-1875）——ダーウィンの伝記において知的観点でも個人的観点でも大きな役割を果たした——によって設定された〈現実性原理〉も役に立つ。これによれば、歴史において進行したすべての過程は、今日でも有効でそれ故原則的に分析され得る、そのような原因のみに起因している。例えば、土地の浸食の原因は過去においても、風による土を運び去り吹き飛ばす作用だったということ、あるいは、一定の化学物質がずっと昔においても、幾つかの生物において突然変異率に影響を及ぼすということは、納得のいくものと想定される。

だが、一般的な意味で歴史的再構成は未来をあらかじめ計算することができないのと同じく、特殊な意味での生物学的進化論からも信頼できる予測を導き出すことはできない。確かにわれわれは、前章で述べられた理由により、未来においても3mの高さで100kgの重量のカブトムシ、立方体の形をしたサメや空を飛ぶサイは存在しないと想定してもよい。しかし、それ以外では、生命の未来は本質的に開かれている。このことはわれわれ自身の種の未来にも関わる。われわれの種は、直接的にであれ間接的にであれ、ひょっとしたらそれ自身絶滅するかもしれないし、しかし、ひょっとしたら引き続き生存するための道を見出すかもしれない。もちろん、永遠にではない。なぜなら、とにかく永遠に持続するものは何もないからである。

未来が予測できないことは、われわれ人間にとっては何か不気味である。それ故、われわれは、われわれが知る限り、可能な未来を考えることに時間を浪

費しないか、あるいはせいぜいチンパンジーのように単に近い将来の目標を目指すにすぎないような、その他のあらゆる被造物を羨ましく思うだろう。しかし、もし未来が、歴史の決定論的な法則に基づいて最初から確定しているとしたら、それはわれわれにとって良いことだろうか。開かれた進化の、それ故に開かれた未来の概念は、あまり重苦しいものではない。しかし、生命進化の、また人間の歴史はいずれにせよ〈法則的に〉進行するのではなく、ともかく決定論的ではない。最初の陸上脊椎動物が自らの中に霊長類をはらんでいないように、最初の霊長類も人間の見取り図を表してはいない。ただ一つのことを、進化からもわれわれ自身の歴史からも引き出される。すなわち、あらゆる発展行程は不可逆ということだ。

進化は、自己組織的な過程であり、それ故、〈上方へ向かって〉つねに開かれている。当然の帰結として、単にあらゆる種の未来だけでなく、あらゆる個体の未来も不確かである。つまり、われわれは何がやって来るか、知らない。もちろん、われわれの誰もが自分自身にとって、また、自分に身近な人々や他の動物にとって最善のことを期待する。これは十分に良いことだ。というのも、希望は重要な生命の原動力だから。逆に、希望の喪失は自己への絶望を含むのであり、それはしばしば、生物学的には反生産的であるといってよい自死を招くことになる。だが、ジャック・モノー (1910-1976) が言うように、われわれの運命は何処にも書かれていない。もしそうでないとしたら、われわれはいわば自然の歴史書を読み直す必要があるだろうし、単にわれわれは何処から来たのかを認識し得るだけでなく、何処へ行くのかということも認識し得るだろう。

## 6 「第5章 意味, 社会, モラル」の議論

一般に、自然科学的な理論にむしろ無関心な人々がダーウィンと進化論に憤慨するのは、明らかに、彼らが一定の道徳的な要求を携えて現れ、こうした要求がダーウィンと進化論によって危険にさらされていると見るからである。逆に、〈インテリジェント・デザイン〉は、道徳主義者にとって、それにより彼ら自

身の社会的及び道徳的な考えを支持することができると信じる概念である。それ故、この概念の社会政治的な関連は明白である。その擁護者が自然科学というマントを羽織ることによって、彼らはいわば時代の高みに姿を見せるのである。そして彼らは、心理学的な理由により相変わらず多くの人々に不快であるような理論と闘うことで、相対的に簡単に多くの信奉者を見出す。さらには、現在、政治や経済、技術におけるあらゆる分野で加速度的な進展が見られる中で、個々人がますます挫折する不安に襲われるため、意味への問いが再びとりわけ蔓延するようになった、という事態が加わる。意味を求める霊長類は、そういう時にはしばしばどんな藁にでもしがみつくのである。

ここでは、〈インテリジェント・デザイン〉の理念がいかに進化論を完全に無視しているか、また、まさにこの進化論は、これを徹底的に厳密に受け取るなら、何ら意味をもたらず要素を含まないけれども、かの理念がそのことをいかに食物にしているか、そうしたことを明らかにする。しかし、われわれの考えでは、この進化論は、他の予期せぬ仕方で、意味ある生命を得ることに役立ち得るのである。

### 1) インテリジェント・デザイン —— 道徳主義者にとっての概念

種の起源に関する著作の末尾で、ダーウィンは次のような、しばしば好んで引用される文章を書き留めた。すなわち、「創造主がわれわれの周りのあらゆる生命の胚を、単に僅かのあるいはたった一個のものに吹き込んだという見方、そして、われわれの地球が重力の法則に従って回転する間に、かくも単純な発端から極めて美しく極めて驚嘆する無限の形態が生じ、いまも生じつつあるというこの見方には、真に壮大なものがある。」

上記で創造主という言葉が使われているからといって、ダーウィンが、著作が出版されたときはすでに、ずっと前から敬虔なキリスト教徒ではなかった、ということが忘れられてはならない。これについては、単に進化の研究だけでなく、個人的な運命的衝撃、つまり最愛の長女アニーの早過ぎる死も関わって

いた。この娘は僅か 10 歳で、たちの悪い病気で亡くなった。自伝の中でダーウィンは、罰する神の考えが極めて意に反するのでキリスト教から離れた、と説明する。

ダーウィンは、『種の起源』という著作を書き、時代の精神に対応した危険な領域に立ち入って、多くの人々をいわば侮辱するだろうということを、知っていた。少なくとも最初の衝撃を和らげるために、彼は言葉の選択で慎重になった。ただし、彼が〈創造主〉という言葉で本当は自然淘汰以外の何ものも考えてなかった、ということは明らかだと思われる。他方、宗教はダーウィンにとって、人間的な心の動きの、たとえ非常に複雑だとしても、特別な表現にすぎなかった。その心の動きを彼は次のように特徴付けた。「宗教的な帰依の感情は、非常に複雑なものである。それは、愛、壮大で神秘に満ちたものへの完全な服従、強い依存の感情、恐れ、畏敬の念、感謝、来世への希望、そしておそらくその他のいろいろな要素から構成されている。いかなる生物も、その知的かつ道徳的な能力が少なくともかなり高い段階に達していなければ、このような複雑な感情の動きを経験することはできないのである。」

こうしてダーウィンは、宗教を進化的に相対化し、それを人間の感情的動機と意識状態のせいにした。宗教的信仰のこうした説明は、宗教の伝統的な内容を信じるすべての人に激しいショックを与えるに違いない。この場合、当然ながら、とくに〈創造問題〉が前景に出てくる。なぜなら、創造主の神が存在しないとしたら、ユダヤーキリスト教の伝統的思考における宇宙的な意味をめぐる空騒ぎ全体は、いずれにせよ、余計なものだということが明らかになるからである。神学者たちは、自然科学者、とくに進化理論家との対話を求めている。それはとりわけ科学と宗教の関係を慎重に探ろうとしてのことであり、そこでは意味への問いにまさに少なからぬ役割が割り当てられている。

この場合、興味深く思われるのは、ダーウィンの著作の出版以後これほど長く、進化論の確立以後二百年間も、以上の議論がますます激しく、ともかく依然として行われるのか、という問いである。これに対する回答は、単に科学的

理論の〈真理〉が問題だ、というのではないことは確かである。だが、もしも進化論を、何千年も前に古代オリエントの文化圏で創造された創造神話と真剣に比較するか、あるいは後者を前者に対して擁護しようとするなら、奇怪なことだろう。同様に、地球は円盤であるという古い考えを、われわれの惑星は球体であるとする〈理論〉に対して擁護することも可能だろう。しかし、1950年代以来、長い間——とまかくヨーロッパで——〈進化か創造か〉という問いから出発して、いずれにしろほんの僅かしか緊張が存在しなかった。教養のある神学者は、進化論及び進化理論家の問題を、実際には創造信仰とほとんど対決させなかった。ただし、現在では状況は違っていて、〈創造か進化か〉という問いに対する議論はたえず引き起こされている。この場合、留意しておくべきことは、〈インテリジェント・デザイン〉の概念は、多くの現代の神学者にとって、間違った教理であるということである。

もちろん、アメリカ合衆国においては、状況はつねに違っていた。この国は、その歴史に基づき、様々な種類の原理主義的な人物の好都合な温床を提供する。アメリカ社会に深く根ざしたピューリタニズムは、〈寛大〉でリベラルな社会政治的見解に対する懷疑を育んでおり、〈神〉は多くのアメリカ人にとって、高い道徳的な位置を占める価値を持つ。その価値が進化論によって脅かされると彼らは見る。それ故、創造主義者とその信奉者は、政治的なやり方で、学校の授業から進化論を遠ざけておこうとするか、あるいは、創造説を進化論に同等な価値を有するものとして援護しようとする。多くの創造主義者は高等な卒業資格あるいは学位を有しており、科学性の要求を携えて登場し、進化論を〈科学的〉に反駁しようと試みる。例えば、アメリカ大統領候補者は、もし彼がせっかくのチャンスをあらかじめ棒に振ることがないようにするとしたら、不可知論者や無神論者であることを公言することはできない。しかしまた、不可知論者や無神論者がこの国で最高の職務に志願するということを、本気で信じることはできない。なぜならアメリカ合衆国では、道徳と宗教性は多かれ少なかれ同一視されるからであり、道徳が宗教的起源とは違った起源を持ち、

宗教とは違った形で根拠付けられるということは、まったく考えられない。

ただし、自分たちの権力要求や指導要求を宗教的に根拠付けること、そのことをアメリカの政治家たちだけのすることだと決めつけるのは間違いであろう。世界の多くの国々の政治家たちが神の祝福を受けていると思ひ込みながら、その職務に就き、彼らのあらゆる決断に際して、何らかのインテリジェントな計画者によって奮い立たせられると感じる。しかし、歴史のあらゆる時代に、自らの行為を、しばしば筆舌に尽くしがたい残酷さとおぞましさを持つ行為を、〈高次の原理〉を示唆しながら正当化した、そういう〈選良たち〉、自ら任命した指導者たちが存在した。

〈インテリジェント・デザイン〉は道德主義者にとっての概念である。この道德主義者とは、自分のモラルあるいは自分の氏族や自分の政党等のモラルを、唯一正当なものとする、それ故、これを絶対化するような人々である。彼らは道德的な絶対主義者かつ厳格主義者であり、他の人々がもしかすると彼ら自身とは違った価値と規範を大切にすることも、と想像することができないか、そうしようとしな。彼らはそれだけ一層自らの見解のために、せいぜい不変で〈揺るぎない〉上位の審級から行う正当化を必要とする。世界の過程を司る〈インテリジェントな計画者〉は、当然ながらこの正当化には打って付けだ。だが、現代の進化論はこの計画者を排除するので、進化論はそれと闘わねばならない、あるいは少なくともそれをきちんと刈り込まねばならない。進化論は〈危険〉な理論である。反対者が好んで科学のマントないしは科学性を身につけるのはどうしてなのか、よく理解できる。一括して科学に反対するのは困難なので、進化論に反対する〈科学的〉な理由を引き合いに出せる場合のみ、進化論は攻撃される。しかし結局、そのような理由は自らの道德的な要求を正当化することのみ役立つのであり、科学的には根拠のないものである。

それ故、〈インテリジェント・デザイン〉は、進化的思考に対する何らかの有用な貢献を表すか、進化論の土台を揺るがし得るような科学的な概念ではない。そうではなくて、それは、単に道德的要求の正当化に役立つだけで、それ

自身の側での政治的な権力要求を合法化することになるような作り事である。もし彼らにとって実際、現代の進化論に対する〈科学的〉な対抗モデルが問題であるにすぎないとしたら、彼らは考慮に値しない。しかし、いつ何時その概念がイデオロギー化され、それ故政治的な権力要求が持ち上げられるか、用心深くしておくことだ。

## 2) モラルの根拠付けのために

〈モラル〉とは、それぞれ任意の社会の安定化に役立つ、あらゆる価値観及び規範の総体である。その場合、その内容は非常に異なっている。あらゆる文化、あらゆる社会がそれぞれの価値観及び規範を備えている。世界的に見ると、何らかの、少なくとも最も広い意味での道德観によって導かれたり、それ故に多かれ少なかれ他の集団から明確に区別されたりしないような人間集団は存在しないだろう。この場合、石器時代の開始以来、われわれの社会史全体に伴ったもので、対応する敵対者像が想定されさえすれば、過度の暴力にまで高まり得るような〈われわれ感情〉が育まれる。

人間はつねに一定の社会的文脈において行動しており、その行動においてはその都度の生活状況によって、あるいは、この状況を彼らがどう感じるかによって、影響を受けないということはない。すなわち、生物学的な生存の至上命令が彼らの指導者なのである。われわれの自然は欺かれない。苦境の時にはわれわれの誰もが道德観念を問題にしない。

人間は一定の事情の下で、いかなる道德的な緊張の場面に駆り立てられるのか、また、ある状況においては、道德的規範はいかに壊れやすいか。そこで、頼りにすべきものは何か。この問いは一般的かつ客観的には答えられない。規範と価値は相対的なものである。規範と価値は天から降ってくるのではなく、他の人間が集まる社会の中での人間の要求に対応するものであり、可変的である。われわれは、先史時代の人間が一定の規則を知ったということから出発してもよい。社会的生物として彼は、その活動において彼の集団の仲間を必要と



し、仲間と協力することを余儀なくされた。すなわち、歴史のあらゆる時代における人間の生活がどれほど抗争に満ちていたとしても、協力と相互扶助は社会進化の決定的な原動力であった。われわれ人間は、他のあらゆる生物と同じく、明白な利己主義者であり、個人的な生存の利害関心を持っている。しかし、社会生活するあらゆる動物種の場合、例えば共同での狩り、外敵に対する共同防衛、共同での子育て等の協力的行動が見られる。仲間が互いに相手の面倒を見たり、助け合ったり、互いへの共感を発展させたりすることの多くの事例が、とくに哺乳類と鳥類の世界において存在する。

ダーウィンの見解によると、道徳的性質は進化において〈社会性本能〉から出現した。われわれは彼の言うことを正しいと認めなければならない。すでに述べたように、価値と規範は天から降ってきたのではない。なおここで強調しておかねばならないが、様々な動物種における社会的行動は、それがどれほど複雑に形成されているとしても、狭い意味でのモラルとは何ら関係がないということである。〈善〉と〈悪〉についての省察はおそらく人間の特別な性質である。確かにホモ・サピエンスは、モラルと反モラルの問いを明らかにする要求を持った独自の分野、すなわち倫理学あるいは道徳哲学を発展させた、最初の（そして、唯一の）地球上での生物だ。だが、われわれが今日倫理的省察の観点から〈モラル〉あるいは〈反モラル〉、〈善〉あるいは〈悪〉と呼ぶものは、いわば、集団の中で個人の生存に役立つような、社会進化における太古の原理を単に延長し精緻化したものに他ならない。そしてこの原理について、大昔から誰も省察することはできなかったし、また省察する必要もなかった。主要なことは、それが機能することであった。

それ故、モラルは社会における生活の帰結であり、あるいはどの社会も、社会そのものとして一般に存在し得るためには、その構成員に幾つかの行動規則を代償として要求しなければならない。社会の構成員は、この行動規則からより多く利益を得れば得るほど、より一層その規則に従うだろう。なぜなら、生物の利己主義的本性は決して始末するわけにはいかないからである。社会生

物学的見地から言うと、例えば〈誰でも我が身がいちばんかわいい〉という言い回しはいわば自然に根ざしたものである。しかし同時にまた、この社会生物学的見地は、集団内で他の個体と協力するのはどうして割に合うのか、しかも、遺伝的な生存利害が最も近い関係にあるので、自分の親族との協力はとくにそうであるといえるのか、を明らかにしてくれる。ダーウィンの自然淘汰説は資源をめぐる競争を含むが、これはまた生物の繁殖〈利害〉の帰結である。われわれ人間もまた決して例外ではないのであり、それ故われわれの場合もつねに抗争が起こる。モラルの体系はまさにこうした抗争がある故に存在するのであり、それは間接的な相互性ないし互惠性の体系として見られ得る。例えば、通俗的には、〈お前が私にするように、私もお前にしてやる〉という言い回しがある。われわれは、自分自身がそのモラルから利益を得れば得るほど、ますます一定のモラルに同調する傾向がある。この場合、利益は、純然たる貨幣を意味する必要はまったくない。そうではなくて例えば、情動的満足や、高い社会的名声等においても表れ得る。しかし、われわれは自分たちの〈善行〉から何らかのものを期待してもよいだろう。このことをあらゆる宗教設立者は意識していたか、あるいは少なくとも予感していたように思われる。そうでなければ、彼らは信者に死後の報酬として来世での美しい生活を約束しなかったであろう。

あらゆる理想主義的なモラルの概念に対立して、われわれはこうして進化論的観点から、非常に冷静な確認に到達する。規範と価値は、神によって、あるいは、その他何らかの〈高次〉の存在者によって創り出されたものではなくて、われわれ自身が構成したものであり、これによってわれわれの社会生活は可能になるのだ。規範と価値は絶対的なものでなく、相対的であり、その都度の生活状況に応じて変化する。動物の社会的行動は、厳格に決定されているのではなく、とくに生態学的条件の変化によって引き起こされる〈混合戦略〉を可能とする、ということがまさに社会生物学的な研究によって認められる。しかし、社会生物学的な観点はまた、一定の行動様式は反対戦略を呼び起こすというこ

とも示す。例えば、コロニーで抱卵するカラスにとって、小枝を自分で森から取ってくる代わりに、巣の材料をその時々隣接カラスから盗むことが最も簡単なことだろう。もちろん、このような行動も存在する。しかし、明白な理由によりそれは成功し得ない。もしどのカラスも巣の材料を自分で手に入れることをしないとしたら、当の個体群はすぐに死滅するだろう。自分の努力で巣作りをした抱卵中のカラスは、用心深く、〈泥棒カラス〉を追い払うことをうまくやってのける。しかしここでも、カラスを本質的に〈正しく〉行動するように仕向けるような、インテリジェントな計画者は必要なかった。ただ自然な繁殖衝動によってのみ、一定の（行動）戦略が反対戦略をも引き起こすということになる。

道徳哲学における進化論的アプローチはあらゆる道徳主義に矛盾する。〈インテリジェント・デザイン〉の理念の代表者はここで憤慨して顔を背けなければならぬことは明らかである。なぜなら、彼らはインテリジェントな計画者によって〈正しい〉モラルを受け取ることができると信じており、そして、われわれの複雑な社会史に基づいて、非常に様々なモラルの体系が存在し、そのすべての体系がそれぞれの正当性を要求し得るものだ、ということを思い浮かべることが困難だろうからである。

自然淘汰による進化によって、われわれは〈モラルの能力〉を備えた。この能力は深くわれわれの系統発生史にまで遡るものであり、その根源は社会生活するあらゆる動物種の協力行動のうちに見出される。ただし、そこから何らかの特殊な規範と価値が引き出されてはならない。それらは、社会進化の比較的遅い過程で構成されたものであり、複雑な社会的特殊化過程の結果であると見なされ得る。簡単に言えば、進化はわれわれに、何が道徳的に正しいかあるいは間違っているかを伝えてくれない。われわれの系統発生史的祖先から、われわれは、ごく僅かな規則でやっていくという〈最低限のモラル〉のみを受け継いだ。単に〈親族を援助せよ〉及び〈後に（高い確率で）お前のために何かしてくれる人々を助けよ〉という至上命令のみが問題なのだ。人々が進化の長い

期間もっぱら共同で生きてきた小集団では、これらの至上命令でもまったく十分である。本来の道徳的問題は、都市化と、今日の匿名化した大衆社会にまで至るたえず増大化する集団の形成と共に成立した。これによって、われわれの生物進化と社会進化との間の根本的な抗争がプログラムされた。

自己自身の生存への利害は別として、人間は非常に相異なる関心事を持っている。これらの関心事は、一方では個人史から、他方では彼らが生きている社会文化的伝統から結果として出てくる。ところが、まさに生存への利害関心が普遍的であることもまた、抗争をもたらすのである。誰もが生存しようとするが、その都度の所与の状況がかなりの数の人の生存を困難にするので、競争は文明化した人間の場合も妨げられることなく続く。ある観点から見ると、競争は厳しさを増しさえする。とくに今日の経済においてはそれを無視することはできない。利益を最大化するために、企業は従業員の数を削減し、直ちに何千人もの人々を路頭に迷わせるか、あるいは、彼らの生産を労働力が安上がりの国々へ移転しようとする。こうして、大が小を食い尽くすことになる。

### 3) モラルと権力

一定の価値と規範が絶対的で必要不可欠と見なされ、その価値と規範を代表する者によってあらゆる人々に無理強いされるとしたら、モラルは大きな危険を意味し得る。これまで〈正しい〉モラルの名において無数の人々が迫害され、拷問され、殺害されたが、そのことの証拠を歴史と現在から引き合いに出すことは必要ないだろう。こうした出来事は十分よく知られており、これに関しては驚くほど多くの目撃者が存在する。あらゆる時代の政治指導者、宗教指導者は好んで〈永遠〉の価値に関連付ける。その価値は、不変でかつ時間を超越したものと考えられるような、高次の精神的存在へ投影されるのである。

しかし、〈変更不可能な秩序〉の理念は進化思想と完全に矛盾する。その理念は硬直した、不変の本質（〈類型〉、〈原像〉等）と関わるのに対して、現代の進化理論にとっては、個体や変異のみが問題である。人間の社会的及び政治

的歴史も、所与で不変の原理に基づくのではなく、個人的利害を追求する個人によって形成される。進化理論家はしばしば次のように非難される。すなわち、彼らは〈生物学主義〉を弁護する、つまり、人間の文化的及び社会的領域にある〈あらゆるもの〉を生物学的な概念、記述、説明に還元する、と。これは実際に繰り返し言われる事実だ。しかし、同様に〈文化主義〉も看過されてはならない。その代表者は、人間を文化的及び社会的な条件のみから理解しようとする。これら両者、生物学主義と文化主義は、一面的な人間像を伝える。

生物学主義が〈社会ダーウィニズム〉として第三帝国においていかにおぞましい結果をもたらしたかは、十分によく知られたことである。その際、ダーウィンの淘汰理論はいわば逆立ちさせられて、〈最適者の生存〉は〈最強者の生存〉とされた。さらに、淘汰は〈無価値の生命の根絶〉というものに解釈を変えられ、そしてナチズムの独裁者はそれをする使命があると思っていた。ダーウィン及び現代の進化論を理解した人は誰でも、そこからそういう帰結を引き出すことはできない。なぜなら、まさに変異の、そして同時に遺伝的多様性への洞察によって、あらゆる社会ダーウィニズム的傾向のイデオロギーは、その土台を取り払われるからである。それ故、社会ダーウィニズムへの適切な反応は、ただ正しく理解された進化論にのみ基づくことができる。

同じ思考の失敗がいわば逆の徴候で付着しているような文化主義は、社会ダーウィニズムに取って代わるべきものではない。〈規範的文化主義〉は、文化的なものの優位という想定から政治的な当為命題が導き出されるという点で際立っている。文化主義は、その代表者が人間の可塑性を信じるが故に、変更不可能な法則の理念に矛盾する、と思われるかもしれない。しかし、実際は逆である。人間が生物としての進化史から解放されているという誤った想定は、社会史的ないしは文化史的な法則のイデオロギーをはびこるに任せるのであり、そのことが以下のような結果となる。すなわち、われわれはこれらの法則を単に認識すればよいのであり、そしてわれわれは望む通りに人間を形作ることができるだろう、と。こうした確信から出発する危険性は、単にユートピア小説

の対象だけでなく、相変わらず政治的現実の構成部分でもある。

文化とは、他の手段による進化の継続である。われわれの文化史は生物進化から解放されているのではなく、むしろ多くの点で、われわれの生存の至上命令をさらに強化するのである。その際に、モラル体系の概念が重要な役割を果たしている。社会の形成と安定化において重要な要因であったし、今もそうである〈われわれ感情〉はもともと、資源の直接的確保と結びついていた。石器時代の集団が、集団に敵対する他の種仲間によって起こり得る襲撃から仕留めた獲物を守ろうとしたであろうことは容易に思い浮かべることができる。しかしそれは、例えばオオカミの群れの場合とまったく同じであったし、今もそうである。ただし、社会進化の後の段階で人間は神話的な世界像を創り出したが、その世界像は自らの行動をいわば高次の段階で正当化するのに役立つ。人間は集団内で妥当する価値と規範を拡張して、自らの集団のアイデンティティとモラルの観念に都合のいい神々を考え出し、そして神々を、結局のところ逆に、自らのモラルの守護者に選んだ。人間は同時に、神々が自分とのないしは自分の集団との血縁関係にあると主張した。こうして、モラルは、重大な権力要因となる。なぜなら、モラルは〈上から〉供給されるもので、それ故、一度根拠付けられたものとして現れると、もうそれ以上根拠の理由を問われることはないからである。

救済の追求は、進化生物学的ないし社会生物学的な観点から言うと、自らの集団（自らの部族、さらにその後拡張されて、自らの民族、自らの国家）を温床とする、〈閉鎖的な世界像〉への憧憬に深く根ざしている。この憧憬には、民族のあるいは宗教的抗争があらかじめプログラムされている。一定の条件の下で、完全に生物社会的な目的（集団の安定化）を持つ〈われわれ感情〉は、暴力的な熱狂へ転換する。そうした現象は過去の歴史と現在からぞっとするほどに十分裏付けられている。

ところで、創造説に有利になるように、文教政策で進化論に圧力をかける試みがなされる場合——近年、幾つかのヨーロッパの国々でも行われた——、

それがどういう理由によるのかは看過されてはならない。そこで問題なのは、要するに、心理学的に理解される、人間の意味への志向が道徳哲学的にしっかりと繋ぎ止められ、そこから権力主張が導き出されるということである。

## 7 「第6章 ダーウィンの宇宙 意味なき世界における 意味ある生命」の議論

### 1) 啓蒙主義と成年状態（自己意識的な個人）

「社会の創造的な力は、国家の介入によって繰り返し暴力的に抑えつけられる」と警告したスペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセット（1883-1955）は、個々人を制御下に置くためにいかなる（技術的）可能性が国家の自由になるかを、予感することができなかった。網目スクリーン犯罪捜査、ビデオによる監視、盗聴工作などは、最近の時代の発展であり、それは、カール・ポパー（1902-1994）が1950年代に国家を〈必要悪〉として特徴付けたときも、まだ予測することはできなかった。彼によれば、国家の権力の権限は、〈必要な程度を超えて増すことなく〉、〈リベラルな剃刀〉の原理に従って制限されるべきものであった。

しかしこの間、国家は経済と神聖でない同盟を結び、そしてこの同盟は急速な速さで個人の禁治産宣告を促進し、〈自分の悟性を働かせる勇気を持って！〉という啓蒙主義の標語を、それが思い起こされる限りで、いつのまにか黙り込ませた。コンツェルンはますます大きなコンツェルンに合併するし、何千人もの従業員を解雇し、これによって自らの資本のみを増加させるが、これはごく僅かの人々にしか役立たない。国家の代表者たちは恥知らずにもこれに加担するのである。

しかし、国家は人格ではない。〈国家の意思〉のような表現様式は、国家が有機体として考察され得るという、かの古いかつ危険な信念に根ざしている。一方、この信念は、抽象的な〈本質〉にはそれ固有の実在性が認められるべきであるという理念に根ざしており、もちろん、そこからは以前から権力の権限



も導出されてきた。進化論は完全に違った考察様式を思い起こさせる。〈実在的〉なものはただ個人だけであり、国家及びあらゆる超国家的ないしは国家間の組織は構成物である。〈国家〉は何かを〈意欲する〉ことも、何かを〈する〉こともあり得ないし、誰かを〈処罰する〉こともあり得ない。その都度の自らの表象、願望、意図と目標を持った具体的な個人のみが〈行動する〉ことができる。こうしたそれ自体瑣末な事態は、〈国家〉と個々人の間の関係が問題である場合、極めて重要である。この場合、つねに〈人間の相互の関係〉のみが問題となり得る。つまり、国家の担い手（例えば、大臣、食品検査官、裁判の遂行者あるいは死刑執行人）として働く人々と、自分たちの行動に対して国家的権限が与えられていないあらゆる他の人々との間の関係である。

それ故今日、進化論的観点は、それが個人とその精神的及び社会的なポテンシャルを前景に押し出す限りで、啓蒙主義に寄与することができる。しかし、このことはまた、個人たる人間がその役割を意識し、上位の抽象的な審級の名の下に個人から成年状態を奪おうとするような人々の禁治産宣告の戦略に対して抵抗しなければならない、ということをも意味するのである。それ故、われわれ個々人それぞれが、個人はいわば価値をそれ自身で形成するのであり、〈経済〉や〈国家〉のための単なる〈人的資本〉あるいは〈人的資源〉ではない、ということをはっきりと示すべきだ。人間には優位への傾向と並んで、従属への傾向性も内在しているので、こうした要求の実現のためにはある種の努力が必要である。

われわれの持つ霊長類という遺産を、われわれは単純に捨て去ることはできない。進化論は、ホモ・サピエンスは単なる霊長類にすぎないという洞察をもたらした。すなわち、特別な能力を持ったサルであるとしても、まさにサルである。そこから、進化論的に基礎付けられた世俗的なヒューマニズムの意味で、以下のような認識が出てくる。すなわち、われわれの種の中の他の構成員の運命を決定しようとする、あの構成員もまたサルにすぎないということ、また、われわれ——残りのサル——には、彼らに特別な信頼を寄せる理由は何もな

ということ，である。

それ故，啓蒙主義を経た，成年状態の人間は，彼自身の個人的な〈生命の意味〉を見出し，その生命の意味を曖昧な形而上学的思考概念において求めないようにすることができると自ら分かるはずだ。意味の創設，意味の付与は例外なく個人の事柄であるが，その個人はもちろん第一に自分自身の生命（生活）に関心を持つ。しかしそれにもかかわらず彼は，他人の利益となり，他人に意味ある生命（生活）を得させるような行為を実現することができるということ，そうした考えを貫徹するためには，幾つかの思想的ごみを片付けなければならない。意味を創設する行為，ともかく，われわれが知っているような行為は，第一に，他の同類と集団で生活し，そのことについてもよく考えることができるような，生物に結びつけられている。同時に，われわれは，例えばゼブラを殺すライオンは確かに自分自身の生命と生存のために意味ある行動をしているが，しかしそのことと，われわれ人間に固有の仕方での意味への問いとは〈結び〉つかない，という確信に浸っていてもよい。

われわれホモ・サピエンスのプログラムには，まさに意味への探求も含まれる。すなわち，この探求は，（ライオンや他の被造物の場合と同様に）基本的な生命の必要を満足させることに尽きるような，そうした生存の直接的な合目的性を超えたものである。ライオンにとっては，ゼブラを殺して食べ，繁殖に成功し，それ以外ではできるだけ煩わされないような寝床を見つけることで十分であるが，人間はそのことを超えてさらに，自分の立場を強固にするような，宇宙の計画を求めるという傾向を発展させた。われわれの文化圏では二千年以上にわたって，とくに人間を世界の中心に位置付けようとする極めて影響力のある世界像が支柱を提供している。

だが，これを克服することは多くの人々にとって，明らかに単純ではない。人間は自然的存在であり，その特殊性は，自由な，自然法則を超えて漂う精神の中に存するのではなく，非常に大きな，進化的に規定され，文化的に実現されている行動の可変性の中に存する，と見なすことが必要であろう。しかし，

そうした特殊性はささいなことではない。われわれは確かに進化の原理に従属しているが、この原理は決定論的な法則ではないし、進化は開かれた過程であるので、われわれは自分が操り人形だと感じる必要はない、そうではなく、一定の限界の範囲で、かなり発展の可能性を意のままにできるのである。

## 2) 絶対的なものからの決別

絶対的なものへの信念は西洋的な思考の伝統の中に深く根ざしている。この信念は、とくに〈不変な本質性〉あるいは〈類型〉への信念として明らかになる。また、それはとりわけ〈絶対的な真理〉と〈絶対的な価値〉を示唆する。ただし、進化論の見地から言うと、この信念は支持し得ないものであることが明らかとなる。ここでは、3点に要約して確認することができる。(1)進化は変転、変化を意味する。変転の実際の担い手は、つねに〈生命の流れ〉の連続体の中にいる個体であり、定義からして不変である硬直した〈類型〉ではない。(2)われわれの脳は進化において、この世界に関する〈真理〉を発見するためではなく、単にその〈担い手〉にこの世界での生存を可能にするために創られた。(3)価値と規範は何処にも設定されてはいない。われわれはそれらを自分自身で考え出さなければならない。モラルは天から降ってきたのではない。それは、社会的生物としてのわれわれの進化の成果であり、それ自身の生存の利害をめざす諸個人と集団の生存の利害をめざす諸個人の間の相互作用を規制しなければならないという必要から生じたものである。

それ故、絶対的真理もなければ、絶対的価値もない。そうした言明は、最初から秩序付けられた世界に生きていると信じる人々にはショックを与えるか、少なくとも憤慨させるかもしれない。

しかし、この進化論的観点は決して〈人間の価値〉を狭めるものではない。まったく逆に、個人の意義を認識し承認する者は、個人的な欲求を受け容れ評価するだろう。また、ホモ・サピエンスという種のあらゆるメンバーがいわば一つの系統樹の枝に位置し、同じ感情的、情動的な動機を備えており、生存す

るという欲求があらゆる者に固有であるということを理解する人は、〈道徳的な最小限の要求〉を受け容れるために、特別な努力を費やす必要はないはずだ。どの人間も身体的・精神的な苦痛を感じることができるので、彼にそのような苦痛は加えられないはずだ。ただし、こうした道徳的至上命令に従うためには、絶対的価値への信仰は必要ない。ここでは、人間本性の知識があれば十分である。

それでは、われわれは何を拠り所とすることができるのか。ここで強調しておかねばならないことは、規範と価値の拘束力はあらゆる人間の生命及び生存の必要からのみ根拠付けられ得るのであり、抽象的なモラルの原理は必要ない、ということである。モラルは、真理と同じく、独自の絶対的なカテゴリーとして、われわれ人間から独立に存在するのではない。モラルはわれわれによって創り出され、われわれのその都度の特殊な生命の必要に従って変更もされる。

現代の進化論によって支持された見解、すなわち、価値と規範はわれわれの生活の現実に根ざしており、それらには何ら根拠のある絶対性の要求は内在していないという見解は、もちろん、〈原理上の倫理〉を排除する。つまり、求められるのは〈個人的な行動モラル〉である。

道徳的な意見の相違はつねに存在したし、将来もそれは存在するだろう。実際に、絶対的な、人間から独立に存在する価値と規範が存在する場合のみ、事態は違ったものになるだろう。問題はただ、われわれが——啓蒙された霊長類として——そのことをいかに扱うかということである。

### 3) それでもなお、意味を肯定する

ダーウィンと現代進化論に基づく著作の根本テーゼは、われわれの世界には何ら計画も、意図も、前もって定められた意味も存在しない、ということである。さらにここで立てられたもう一つの根本テーゼは、〈インテリジェント・デザイン〉への信仰は、結局、道徳的な絶対性の要求及び政治権力の貫徹に役

立つにすぎない、ということである。

第二の根本テーゼは第一のそれよりもっとよく証明できるように思われる。というのも、われわれは〈インテリジェント・デザイン〉の扇動者を直接に観察することができるからである。だが、われわれがこの世界に関する科学的認識で今日意のままにできるあらゆることをひっくるめて考えると、第一の根本テーゼもますます確証されるのであり、宇宙は全体として意味あるものに組織されているということを示す証拠は見出されない。

しかし、人々が意味なき宇宙で生きているということを、彼らに教えるよう努力しなければならないのか。飢えて苦しむ人や、腕を切断された人、自然災害に襲われた人、あるいは末期状態にあるエイズ患者にとって、そのような努力は何の役にも立たないだろう。経済的に満足していて、(物理的)害悪に苦しむこともないが、それでもなお生命の意味を追求する人間が、むしろこうしたメッセージの受取人である。ただし、客観的意味への信仰を放棄するように人々に強制することは問題となり得ない。このことは逆に固い信仰を有する原理主義には当てはまるだろう。さらに、啓蒙主義を経た自然主義者に——あるいは、自然主義的な啓蒙家に——教義を他の教義と取り換えたり、人々が信じなければならないことを彼らに命じたりすることは問題となり得ない。ここではただ、探し求める人、疑い深い人、優柔不断の人に対する提案を問題としているのだ。問われているのは、伝統的な〈意味の指令〉に代わるもう一つの選択肢であり、それは科学及び科学哲学の帰結と一致する。

目的論の理念に別れを告げ、理念をもたらずあらゆるものを備えたわれわれの意識も進化の帰結であると理解するとしたら、意味は人間の構成物であり、何らかの〈事柄〉——あるいは全宇宙——の本質的性質ではないということも理解されるだろう。〈意味〉はわれわれの日常においては第一に、間近な目標に限定された単なる生活実践の概念である。われわれは「これは意味がある」と言い、また、われわれにとって獲得する価値のある特定の目標を達成するが故にやりがいがあるということで、われわれの行為を根拠付ける。もちろん、

われわれは一般に、〈有意味〉に行動するように努力しているが、われわれの時間を〈無意味〉なくならないことで浪費しなければならないとしたら、腹が立つものだ。われわれの時間を〈有意味〉に利用するということは、われわれに直接喜びをもたらすか、あるいはわれわれの将来に役立つようなことをすることを意味する。ただしこの場合、問題となるのは、〈個人的〉な意味以外の何ものでもない。それは客観化され得ないからである。というのも、人間は——それぞれの傾向、関心、家族的及び職業的状況に応じて——様々な生活状況の中にいるからである。ある人には切手を集めることが、他の人には歌唱指導を行うことが、それぞれ意味のあることと思われるかもしれない。ある人は山登りに最高の生の喜びを、それ故に意味を見出すのに対して、他の人にはバードウォッチングが生目的となるかもしれない。

われわれ自身の行為以外に、他の生物の行動も様々な仕方では〈有意味〉だと思われる。例えば、ひなの哺育を行って、ひなにさらに進んだ生活並びに生存の機会を与える動物は、そのことによって有意味なことをしている。ここで強調しておかねばならないが、行動様式の包括的な記述と因果的説明に努力する行動研究者は、方法論的理由により〈高次の意味〉から出発すべきではない。ただ宗教、イデオロギー、一定の哲学体系は、包括的な意味のカテゴリーなしではやっていけない。しかし、進化論を原則的に受け容れる人間が、進化は（危機と破局にもかかわらず）意味を持たねばならないし、たとえこの意味が理解しやすいものでないとしてもそうだと、いうことを確信していたら、次の問いが許されているにちがいない。すなわち、隠れた意味がどういふふうにならねばわれわれに役立つのか、と。人間が不合理な間違った道を行くことができるというのは、まさに進化論的観点からみて驚くべきことではない。というのは、自己欺瞞でさえ有益であり得るからである。楽観主義者は、より長くはないとしても、より幸福に生きる。しかし、〈真の楽観主義者〉にとっては、自己自身に対する信念と、彼の環境が自分に対して肯定的に反応するという確信があれば、それで十分である。

われわれは、多くの人間は他の人間と調和した生活を、憎しみと暴力のない生活を望むということから出発する必要がある。これはあらゆるヒューマニストの願望、理想であり、ダーウィンもその一人だった。ダーウィンは決然として奴隷制に反対しており、人間は文化の進展の中で社会性本能を改良し、彼の共感範囲を、さしあたってあらゆる同種仲間へ、そして最終的には他のあらゆる種へと拡大するだろう、という希望で心を満たされていた。この希望は、進化論によって根拠付けられることはなく、むしろ気高いユートピアの表現であった。しかし、それは意味の問いとの関連で重要でないわけではない。われわれは、われわれの社会において積極的に活動し、社会を改良することを有意義だと見ることができる。その場合、われわれは世界の変革に努力することを直ちに必要とするわけではない。いわば小さな範囲で積極的に活動すれば、われわれにはそれで十分である。

われわれが子どもに贈物を与えて喜びをもたらす場合、つまり、われわれが子どもにいかなる喜びの感情をもたらしたかを目にする、そう、まさに肌で感じることができる場合、われわれのほとんど誰もが十分な喜びで満たされる。しかし、大人の間でも、贈物は喜びの提供者である。贈ることによって喜びが生まれる、と言われるが、それはまんざらでもない。行動研究と文化比較から、贈物をする事とされることは社会生活の基本的原動力である、ということのをわれわれは知っている。贈物は友好関係を安定化する。社会的生物として、われわれはさらに〈感情移入〉の、同情の能力を有している。そして、われわれは他の人間に対する同情を感じることができるように、われわれはまた彼らとともに喜び合うこともできる——われわれ自身が彼らの喜びの原因である場合にはなおさらそうである。善においてもまったく利己主義がないわけではない、ということが分かる。だが、それは問題ではない。ここで重要なことはただ、われわれが自分の行為を有意味なものとして感じ体験するということである。〈真の人間性〉等の気高い概念がなくとも、われわれは、他の人間の肯定的な感情によって直接的な(あるいはまた間接的な)反応を経験するが故に、



われわれの生活における多くの行為を有意味なあるいは価値のあるものとして格付けすることができる。しかしその場合も、われわれは依然として個人主義的な意味概念に結びつけられている。

意味を創設する生物である人間は、自らが組み入れられている世界を有意味なものとして生きようとする。そのことは確かに〈世界〉について何も語ることではないが、しかし、人間が自らの反省する意識によって調整したいと思い、自分の周辺にある事物を自らに関連付けるような生物であるということについては十分に語っている。個別の対象と個別的出来事を超えて、われわれは〈全体〉はいかなる意味を持つのだろうか、という問いに向かうこととなる。そしてそのことがもちろん、われわれを途方に暮れさせ、それどころか絶望にまで駆り立てることもある。なぜなら、われわれは例えば、何百人あるいは何千人もの命を突然に奪い去り、さらに多くの人々から物質的生存基盤を奪うような地震にいかなる意味を見出すべきなのか。われわれはまた、飛行機事故や鉄道事故に際して、とくに犠牲者の中に親戚や友人がいる場合、途方に暮れ絶望に襲われる。

アルベール・カミュ (1913-1960) は、「真に重大な哲学的問題はただ一つしかない。すなわち、自殺である。人生 (生命) に価値があるか否かを決定すること、これが哲学の根本問題に答えることなのである」と述べた。哲学の根本問題として何が重要であるかということについては、論争の余地があるだろう。厳密に生物学的に見れば、自殺、自死は、ともかく〈反生産的〉である。自死は、自然の至る所で支配的な、生存への欲求に矛盾する。生命に価値があるかどうかという問いは、生物にとっては問題とならない。大事なことは、その都度の種特異的な条件の下で可能な限り長く、生き続けることなのである。人間が初めて、生きることに価値があるかと問うに至ったが、しかし、あらゆる他の生物種と同じく、人間は生存への基本的欲求を備えているのであって、生への疑念を抱くようにはプログラムされていない。このことはとりわけ極限状況、例えば戦争において明らかとなる。兵士たちはふつう自分の生命を心配

しており、生命に価値があるかどうかということにさいなまれることはない。自死は、どの場合もそれ自体極めて悲劇的と見なされるが、例外的なものであり、ふつうではなく、生物学的な異常である。それは、いかなる人間集団においても大きく広がることはなかったし、その他の動物界においても実際には決して起こらない現象である。

しかし、われわれは、無意味さの感情が自死行為の決定的な動因であるという事実を看過してはならない。自らの生命がもはやいかなる意味も有せず、これ以上生きるに値しないという認識あるいは〈単なる〉危惧が、唯一の逃げ道として、自死を〈意味ある〉ものと思わせるのである。空腹の人々が無意味さの感情の故に絶望することはほとんどない。しかし、そういう彼らも、あらゆる満腹の人々と同じく、自分たちが取るに足りないものとして宇宙から見放されているという事情のために、傷つけられると感じるかもしれない。世界における災いはほとんど限りなく増大している。空腹な人間を、さらに追い討ちをかけるように、地震やハリケーンが見舞うこともあり得るのである。もし、ものすごいハリケーンがやってくるという予報があるとしたら、この自然現象の考えられ得る隠された意味をじっくり考える代わりに、急いで持てるだけの荷物をまとめて遠方に逃げるのが最善だ。

本書で提示された見地から、われわれはいかなる上位の意味も受け取ることはない。実際、進化論を真摯に考える人は、自然は〈完璧〉ではないと理解する。ただ単に物事が起こるのであって、その際、誰かが何かを考えたわけではなかった。進化によってわれわれは、とりわけ自己自身の死という（必ずしも心地良くない）意識を含む、反省的意識を備えた。しかし、進化によってわれわれは、その脇を固めるものとして、幻想を生み出し育てる可能性を身に付けた。例えば、宇宙に客観的意味が内在するという幻想である。これによれば、ほとんどインテリジェントな計画者が存在するように聞こえる。だが、問題となるのは、進化において、保存されるものはすべて促進されるが、その他のものは滅びるということである。自己反省的意識と自己自身の死に関する知識を

備えた種は、もしその種がいわば、あの重苦しい知識に対するバランスとして、意味たるものを発見しなかったとしたら、おそらく早くから集団的自死の犠牲となっただろう。しかし、この意味たるものは、インテリジェントな世界の計画者に対する信仰に繋ぎ止められる必要はなかった。われわれは自分自身の生活の中に意味を見出すことができる。それ故、意味ある生命（生活）は意味なき宇宙においても可能なのである。

われわれの日常のささやかな喜びは、意味ある宇宙を必要としない。われわれは、時間空間的に制約された行動可能性のうちで、自らの存在に意味を与えることができる。われわれは社交的な生活を、面白い仲間との会話を、様々な本を読むことを、犬、猫、カナリアのような異種のペットとの付き合いを、美しい景観を、絵画や音楽、この世界が日常的にもたらしてくれる、様々な〈月並み〉の現象や出来事を、それぞれ楽しむことができる。ただし、われわれがしかと目を向けることを忘れず、教会や政治、経済におけるあらゆる反啓蒙主義者から目くらましに合うことがない場合である。さらにまた、もしわれわれが、今日至る所で偉そうにもったいぶる多くのいわゆる善人、健康人、組織人の出過ぎた振る舞いをたしなめる場合である。

それ故、全体として意味なき世界における意味ある生命（生活）は可能であり、われわれ自身の生活と生存に役立つ望ましいものである。ただし、われわれはそれを過大評価してはならない。もしわれわれが、ときには少しばかりの自嘲をもって自分の生活を考察し、われわれの誰でも免れることのない不愉快な状況に出会う際に、例えば「状況はどうしようもないが、しかし、深刻なものではない」と割り切るとしたら、われわれの精神的な健康には悪くないだろう。しかし、われわれは、何らかの疑わしい考えやイデオロギーの名の下にわれわれの生の意味を主張するような人なら誰も必要ない。こうした推論の帰結は真摯に考えられねばならない。それは、自分の固有の価値及び自己目的へ個人を連れ戻すのである。意味を〈肯定〉することは自らの生活を〈肯定〉することであり、社会における生活を〈肯定〉することである。社会というのは個々

人なしでは存在し得ないのと同様に、個人は社会なしでは満足すべき生活を送ることはできない。前もって定められた、上位の、宇宙にいわば植え付けられた意味というもののへの信仰は、この場合、不必要なのである。

われわれに生命(生活)の意味を伝えることは進化論の課題ではあり得ない。なぜなら、進化論は、いかなる計画もいかなる意図も認識させることのない過程を説明するからである。そのことは別として、いずれにせよ、意味の問題を説明することは、何らかの科学的理論の本質には属さない。熟考する生物種としてのわれわれが逃れることのできない意味の追求は、われわれ自身の責任感の中に含まれる。そこで、ダーウィンの『種の起源』末尾の文章に変更を加えて言えば、こうなる。すなわち、進化がわれわれに、われわれの生命を意味あるものとして考察し得る能力を、また、単なる遺伝的生存を超えて、われわれの存在に尊厳なるものを付与する能力を、吹き込んだという見方には、真に壮大なものがある。

## 8 「結語 新しい個人主義のための最終弁論」の議論

人類の歴史はこれまで、一方ではたいてい、われわれの種の自己僭越と自己賞讃の歴史として書かれたが、他方では、それは個人の抑圧の歴史である。このことはとりわけ、〈個人主義〉は今日でも変わり者や順応できない無能力に關係付けられるという事情において、明白になる。個人主義者たちは確かに感心されうらやまれたが、しかし同時に疑いを持たれており、とりわけ道徳的な観点ではそれほどまともには信賴されないだろう。古代に、ルネサンスに、啓蒙主義の時代に、個人の固有の価値が承認されたこともあったが、しかしまた、それはしばしば個人主義者たちによってのみ承認されたのであり、そしてこの個人主義者たちは、後の歴史において、またもや疑わしい人物として思われ、存命中に軽蔑され追放されるのも珍しくなかった。そのうちの一人がヴォルテール(1694-1778)である。彼は、他の多数の哲学者たちをひっくるめたよりも多い影響力を持ったが、しかし、おそらくはまさにそれ故に、多く

の哲学者にとっては不気味な存在だ。そのため、観念論者と道德主義者は、彼を引き合いに出すことはできない。しかし、人間及び人間生活に関する〈実用主義的〉な見解を持つ人にとっては、ヴォルテールは相変わらず思想と批判的反省の宝庫なのである。

ヴォルテールは大胆にも、ヨーロッパのキリスト教に基づく世界と人間に関する様々なイメージに逆らっていた。しかし、いかなる世紀に彼が生きていたのか、よく考えてみると、彼がときとして逃げたり、彼の多くの著作を用心のためペンネームで公刊したりしなければならなかったことは、不思議ではないことが分かる。さて〈自己愛〉について、ヴォルテールは次のように述べた。「自己愛は冷酷非道さとは何ら関係ない。それはあらゆる人間に生まれながらに内在する感情であり、犯罪よりもはるかに虚栄心に近い。」もしもヴォルテールが進化論について何か知っていたとしたら、彼はおそらく非常に喜んであろう。逆に、今日の進化理論家は現在の立場から、自己愛は〈生まれながらに内在する感情〉である、ということに同意するに違いない。利己主義は生命の基本的原動力であり、それなしでは人間もやっていけない。しかし、人間を観念論的に美化する人々だけは、それを別な風に捉えて、自然淘汰による進化の帰結としてわれわれの種の本質をなしているものを無視するのである。

だが、先見の明のある倫理学者はずっと前から、どのモラル体系においても、利己主義は考慮されねばならない、と認識していた。スイスの倫理学者ジャン＝クロード・ヴォルフ（1953-）は〈倫理的利己主義〉を代表しており、彼によれば、この利己主義は場合によっては、自らの生命に意味と意義を与えることができる。その点で、自己否定と自己卑小化という禁欲的なモラルに対して利点がある。この倫理的利己主義は、全体としてかなり病的な欠陥で苦しむ肩ひじ社会〔他人を押しつける社会〕が要求し促進するような、病的な利己主義と混同されてはならない。〈倫理的利己主義〉あるいは言い換えると、〈道德的個人主義〉は明確に、われわれ人間は社会性動物であり、少なくとも小集団内で共感の絆を結んでおくことができる、という事実を顧慮するので

ある。

ここで問題となるのは、自らの生命の価値評価であり、これはもちろん、他人の生命の価値評価を排除しない。本書で強調したいことは、われわれは自らの生命に意味を付与するために、何ら宇宙的目的論を必要としないということである。倫理的利己主義者はあらゆる禁止倫理と戒律倫理に対して疑い深い。彼は禁止と戒律を簡単には受け容れないで、それらの背景を批判的に探り、もしそれらが〈高次の秩序〉を指示して出される場合には、それらを拒否するのである。この関連で重要なのはとりわけ、倫理的利己主義者あるいは道徳的個人主義者は、まったく寛大に振る舞い、人間は失敗を犯し得ることを知っており、これらの失敗を世間に触れ回らないということである。逆に彼は、仲間からの寛大さも期待する。彼は自分の人生の計画を持っているが、しかし、他人も彼ら自身の計画を持っていることを彼は承知している。同時に、倫理的利己主義者あるいは道徳的個人主義者は、他人の計画によって簡単に影響されたり、押しつけられたりはしないだろう。

人間の巨大社会では、歴史と現代が無数の事例を示しているように、指導権が制限されるまでは指導体制は非常に長く続き得る。そして指導権の交代が起こるのは、非常にしばしば、ようやく政治史の破局的な過程に続いて、多くの流血の革命で知られるような、さらなる破局が勃発することによってである。われわれは歴史から学ぶことはできる。しかし実際は、われわれはいわば果てしなく過去の失敗を繰り返すのである。

その理由はとりわけ、人間は指導者の人物に付き従う傾向があり、また、仲間はずれにされないように—— 諺に言う〈5番目の車輪〔無用の長物〕〉には誰もなりたくない—— どんな愚行でも一緒にやる、ということに存する。例えば、人間は、軍隊に入隊するのは国民の義務（それが何を意味しようとも）であると信じ込む。そしてその場合、個人的な利害と人生目標には関係なく、数ヶ月あるいは何年も退屈な兵役を果たし、関わり合いになりたくない人物、また、その意図と目標が自分自身のそれと矛盾するような人物から嫌がらせを

受けるのである。その上、そのような人物の場合、疑わしい指導者の人物あるいは抽象的組織によって彼らに与えられた〈権力〉に基づいて、他人を支配し苦しめることが許されるということによってのみ、自らの個人史的に根拠付けられたみずばらしさを相殺することができるというような人間なのである。こうした現象は軍隊に限られたものではない。

われわれは今日至る所で、無数の検札係、監視人、見張り番の姿をしたこの現象に出会う。彼らは空港や鉄道駅、その他のいわゆる公共空間で飛び回り、もったいぶっていて、彼らの権限を〈保安機関〉として味わい尽くす（その際、時として野蛮な行動さえ起こす）。なぜなら、そうでなければ彼らは自らのみずばらしい生活から何も勝ち取れないことを心得ているからであり、また、彼らにとってももちろん見通しのきかない疑わしい当局の名の下に、子どもっぽい夢を存分に楽しむことを喜んでいるからである。「早めに手を打て」と言われるが、しかしわれわれは今日—— またもや—— 個人の自由剝奪と基本的権利の制限の方向で、ずっと前からもはや開始の時点にいてのではなくて、その展開のただ中にある。この個人の基本的権利は、われわれが二百年間の啓蒙主義を経て獲得していると信じたものなのである。

それ故、ここで、新しい個人主義の最終弁論が行われるが、しかし、何処がそれほど新しいのかと問われるかもしれない。その回答はこうなる。すなわち、進化論のお陰でわれわれは個人主義を発展させるということだ。あらゆる従来の—— 古代以来、個人の意義とその（個人的な）幸福生活への権利を促進した——（哲学的）潮流が進化的思考なしにやっていかねばならなかった限りで、この個人主義は新しいのである。当然ながら、進化論は自然科学的理論として、極度に酷使されるべきではない。というのは、その場合、イデオロギー的逸脱が排除されないからである（社会ダーウィニズムを見よ）。しかし同時に、進化論は介添えを提供し得る、しかもヒューマニズムの世界像という意味での介添えだ。進化論において重要なのは、言うまでもなく個人（個体）である。すなわち、個人（個体）を保護する、あるいは個人（個体）に特別な役割



を帰する審級は、もちろん、存在しない。しかし、個体は、生物界の中で唯一具体的なものである。種から属、目を経て門及び生物界に至るあらゆる〈高次〉の単位は、これら相互を、しばしば顕著に区別する特徴を持った個体に基づいている。それ故、人間の場合、道徳的個人主義者たちにとっての十分な余地がある。もちろん、この個人主義者たちはつねに存在したが、しかし、その都度自由に使える手段を持った、教会及び世俗の権力によって、その発展が妨げられたのである。

道徳的個人主義者は〈高次の秩序〉に立ち戻ることを必要としない。彼は自分だけで十分であり、そのような秩序を引き合いに出す人々によって自分の生活を台無しにされたくないと思っている。不運な哲学者ジュリアン・オフレ・ド・ラ・メトリ（1709-1751）が述べたように、「物質が永遠のものであるか、それとも創造されたものかどうか、また、神が存在するか否かということは、われわれの魂の平和にとってはまったくどうでもよいことだ。われわれが認識できないような事物で、また、たとえ認識できたとしても、われわれを幸福にすることのないような事物で、さんざん悩んでしまうことはいかにばかげたことか。」

他方で、科学的認識はわれわれに最も深い満足を提供することができる。すなわち、複雑な問題の解決と、世界について何か理解したという感情だけでも、探究する者にまさに有頂天の瞬間をもたらし得るのである。しかしまた、ラ・メトリの言葉は次のようにも解釈されるだろう。すなわち、すべては単に物質にすぎない、その物質はかつて無から生じたように、再びまた消え去る、とわれわれが認識するとしても、われわれは決して不幸に陥る必要はない、ということだ。そして、物質がつねに存在したのであり、永遠に存続するとしたら、われわれはなおさら不安に陥る理由はないのだ。われわれは、あらゆるものが文字通りにわれわれを中心に回っていると信じてはならないし、宇宙におけるわれわれの不確かな存在を悲劇的に受け取るべきでない。科学哲学者のベルヌルフ・カニットシャイダー（1939-）は言う、「中心も方向性もなく、われわれ

に焦点を合わせることも決してない、無限の宇宙の中にわれわれが位置するという認識には、……もはや何らの意味も結びつけられ得ない。だが、滑稽さはわれわれに、僅かの間、世界の侮辱を忘れさせる、そういう一瞬の小さな意味を与えてくれる。こうして、ユーモアというのは、生きがいを得ることができる経験領域の一つなのである。」

例えば、他のそうした経験領域は、科学的問題への従事、文学の創作、快適な人間相互の関係である。しかしそれらはすべて、もしわれわれが〈正しく取り組む〉としたら、ユーモアを排除するのではなく、それを含むものである。たとえわれわれの生活における大して恵まれていない大卒の条件の下であっても、われわれ人間は、多くのことを楽しみ、多くのことを笑い、そして、われわれ自身の制限された活動によって、意味なき宇宙にさえも敢然と立ち向かうことができる。笑う能力は、宇宙におけるわれわれの滑稽な役割をわれわれが克服するのを助けることができる。ユーモアは明らかに目的を持っており、それ故、自然淘汰によっても有利に扱われた。ユーモアの欠如は社会的に反生産的である。このことはとくに、政治と経済における計画者と実力者の胸に銘記されねばならないだろう。いわゆる善人、健康人、組織人の胸に。彼らはわれわれにすぐく真面目な表情で、あるいは無理に繕った微笑みで、われわれにとって何が〈善〉であり、あるいは〈悪〉であるか（すなわち、あらゆる場合に彼らにとって何が〈善〉であるか）を信じ込ませようとするのであり、また、われわれはいかに行動すべきか、われわれは何をなすべきか、を不遜にもわれわれに命じようとするのである。

「機知」という論文において、ジークムント・フロイト（1856-1939）はユーモアの中に痛苦の感情を克服する可能性を見て、次のように述べた。「ユーモアは……快を妨げる情動に阻まれながらもそれを手に入れるための手段である。ユーモアは快を妨げる情動の発生に代わって生まれ、その情動に取って代わるのである。ユーモアの条件が与えられるのは、われわれが習慣に従って痛苦の情動から逃れようとやってみる状況が存在する場合であり、また、この情動を

発生時の状態に抑え込むような諸動機がわれわれに作用する場合である。」

ユーモアは人間相互の関係における緊張をはらんだ状況を緩和し、和らげることができた。微笑みと笑いは葛藤解決の手段であり、社会的絆を安定化させる（共通の笑いが結合する）。ユーモアはわれわれの進化においてはるか前に遡るもので、チンパンジーにおける幾つかの行動表現も一種のユーモアあるいは少なくとも愉快的状態として解釈される。

それ故、意味なき宇宙の中で生きているという状況の故に、場合によっては起こるかもしれない痛苦の情動を、われわれはユーモアで相殺することができる。そしてさらには、われわれ各人が自分で自分なりの仕方で、快適で意味あるものと感じる、われわれの存在のあの諸局面の方に向かうことができるのである。

進化によってわれわれは、生命（生活）を快適なものと感じ、そして、われわれ自身に幸福感を与えることができる能力を備えた。例えば、本を読むことによってわれわれは元気を得ることができるし、その際一杯のワインを飲んだり、タバコを吸ったり、バックグラウンドミュージックに耳を傾けたりする。そのように湧き起こるまとまった快感によって、われわれは客観的な宇宙的意味を求める重苦しい探求から解放されるし、また、誰もが、そうした意味が存在するに違いないという誤解に依存する人々の側からの幸福感の強制から逃れる。

自然淘汰による進化のみがわれわれを、以上に見た可能性を持った存在としたという見方、他方で、宇宙が絶え間なく拡大し、宇宙的破局——ただし、この破局は、宇宙にとってわれわれの存在が〈どうでもよい〉ものであるのと同様、われわれの幸福の時点ではわれわれにはどうでもよいものとなり得る——により様々な星及び星のシステムが発生したり消滅したりするという見方には、真に壮大なものがある……。

## 〈紹介文献に関するコメント〉

ヴケティツは、本書の全体を通じて進化論の見地から、この世界に客観的で絶対的な価値、目的、意味というものは存在しないということを明らかにした。しかし、そうであれば、人間の政治経済的、社会文化的活動等々は存在理由を持ち得るのか。しかり、「意味を創設する生物」である人間は、無目的、無計画、無意味という世界の中に意味を付与し、意味ある生活を求めるのであり、それが例えば政治経済的、社会文化的活動等々として展開されるのである。

〈意味〉というものについて、ヴケティツは個々人の生活（生命）に関わる事柄をとくに考えている。大上段に構えて、人生に意味があるのか、世界に意味があるのか、と問う必要はない。それはごくふつうの日常生活においてのやりがいとか、生きがいとか、仕事とか、趣味とか、あるいは、スポーツとか、旅行とか、散歩とか、内輪の談話とか、その他何でもよい。何かあることに時間をかけることが有意味だと思えるのであれば、そこにわれわれは意味を見出していることになる。いや、意味があるかどうかと考えなくても、そうした人々との関わりや個々人の行動において、喜びや悲しみ、あるいは怒り、嘆きでさえも、われわれが感じるとき、そこには何らかの意味がある。

ヴケティツは、自らの生活（生命）に意味を付与する主体として、啓蒙主義を経た個人、倫理的利己主義者、あるいは道徳的個人主義者であることを求める。いわば、かつてニーチェ（1844-1900）が既成の道徳的価値の価値転換を唱えたように、ヴケティツも、もちろんニーチェ的文脈とは異なるけれども、既成の体制や権力機構、宗教的権威などの主張するモラルからの価値転換を唱える。そして、その際の導き手となるのが進化論である。進化論において重要なのは、個人（個体）である。さらに言えば、その個人（個体）の生存、利害関心なのである。ただし、個人（個体）は基本的に社会性動物として、仲間との共同、協力なくして生存し得ない。それ故、利己主義者ではあるが、仲間との共同、協力を大事にするということでは倫理的である。要するに、倫理的利

己主義者、道徳的個人主義者なのである。

ヴケティツは、新しい個人主義を提唱する。あらゆる従来 of 個人主義的潮流が進化的思考を持たなかったのに対して、この個人主義は進化論的裏付けがある限りにおいて新しいのである。18世紀の啓蒙主義、19世紀の進化論を経て基礎付けられた個人主義を拠り所にして、ヴケティツは、国家権力や宗教的權威によって押しつけられた価値や目的、意味というものに抗する新しい個人主義を提唱する。このことはとくに、個人及び社会の生活に対する国家の介入、過剰な規制など、監視社会化する現代にあつて、極めて重要な課題ではないか。オルテガ・イ・ガセットも警告しているように、「社会の創造的な力は、国家の介入によって繰り返して暴力的に抑えつけられるだろう」。

さて、客観的で絶対的な価値も意味もない世界において、われわれはいかに生きることができるのか。人は、生きることの意味がないと思うとき、たいへん悲しいことだが、〈自死〉に意味を求める。もちろん、決して〈自死〉そのものに意味があるとは思われない。それでも、残念ながら、人は意味あるものとして〈自死〉におもむく。実際には、生きることの意味を求めるようなきっかけがあれば、〈自死〉を選ばない人もいるだろう。ヴケティツは次のように言う。「自死は、どの場合もそれ自体極めて悲劇的と見なされるが、例外的なものであり、ふつうではなく、生物学的な異常である。それは、いかなる人間集団においても大きく広がることはなかったし、その他の動物界においても実際には決して起こらない現象である。しかし、われわれは、無意味さの感情が自死行為の決定的な動因であるという事実を看過してはならない。自らの生命がもはやいかなる意味も有せず、これ以上生きるに値しないという認識あるいは〈単なる〉危惧が、唯一の逃げ道として、自死を〈意味ある〉ものと思わせるのである。」

もしも、無意味さの感情が自死行為の決定的な動因であるとするならば、われわれは日常の生活において、日常の行為において、自らの生命（生活）、行為（行動）に意味を付与することの重要性を確認することができよう。べつ

に大上段に構える必要はない。われわれはときに、精神的な悩み、苦痛の感情に襲われることがある。生きていくうえで、ある意味それは避けられそうにない。とりわけ、稠密な人間関係の中で生きているわれわれにとって、社会的葛藤は起こり得るものである。これを解決するうえでの一つのよすがとして、ヴェケティツはユーモアを挙げている。ジークムント・フロイトもユーモアの中に痛苦の感情を克服する可能性を見ていることは、本書で指摘されている通りである。

ところで、2017年5月に南米のエクアドルで誕生した、車いすの大統領レニン・モレノ氏は、かつて強盗に背中を撃たれて下半身不随となり、車いす生活になった。彼は仕事もなくし不遇の時期を過ごすことになるが、見舞いの人の冗談につられて笑うと、傷の痛みが和らいだそうで、そこから、身体や心が病んだときはユーモアが最良の薬になると気づいたとのことである。ちなみに、笑うと、生命活動を維持するために必要な神経、主に内蔵器官の働きをコントロールしている自律神経（交感神経と副交感神経）に変化が起き、身体中の様々な器官に刺激が与えられ、とくに脳への刺激によって、神経ペプチドという免疫機能を活性化するホルモンの分泌が促される、という。そうした点からも、ユーモアと笑い、微笑みはわれわれの人生において、その都度の効果は微小だとしても、長きにわたって蓄積される効果は極めて大きいと言えよう。